

---

# 『エデン』～三つの瞳～

ドラゴンツリー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『エデン』～三つの瞳～

### 【Nコード】

N8468C

### 【作者名】

ドラゴンツリー

### 【あらすじ】

異世界エデンには、三つの瞳の言い伝えがあった。一つ目は魔眼と称される闇の瞳、二つ目は邪眼と称される死の瞳、三つ目は聖眼と称される光の瞳、恐るべき力を秘めたこれらの瞳は古い文献にはその存在はしっかりと書かれていたがそれらの瞳がどのような力を持っているのかは書かれていなかった。あるはずのないものには人々の関心はいかず・・・その伝承はどこかの書庫の奥へとしまわれてしまい・・・この世から姿を消した。

## プロローグ

この物語の舞台となる世界は地球とは異なつた文明を発展させた世界『エデン』

魔法使いや獣人や幻獣など存在が在り得ないものでさえ存在する。

誰一人この世界から拒まれはしない・・・そう誰一人として・・・。

物語が始まるのは、帝国と呼ばれる世界屈指の戦闘力を有する戦闘国家『レーデン』の兵士とその帝国の時代を終わらせようとする者達の集まり『レジスタンス』との戦場・・・。

次から次へとレジスタンスの兵士が、帝国の兵士が消えていく。

初めは分からなかった・・・なぜなら両部隊の兵士とも悲鳴をあげるまもなく忽然とその存在を無くしていたからだ。

そしてある時帝国の兵士は気付いた、周りの所々に鎧が脱ぎ散らかされていることに、兵士は逃げたのかと思ひその旨を軍の指揮をしている將軍アルマに伝えた。

だがアルマは困惑した。それはアルマのいる場所は戦場を一望できる様な高い丘で見えている限り逃げた兵士などいなかったからだ。

その時アルマは気付いた、相手の方でも同じ事が起きていることに・・・。

アルマは目を凝らして兵士達全てを見た。すると兵士の一人が鎧を残し突然消失した。

驚いたアルマは兵士達の足元を動く影に気が付いた、そして全ての兵士を一度撤退させた。

そしてアルマは単身で戦場に踊り出た。

それを見たレジスタンスのリーダーエルリスも一度撤退を命じ馬へ騎乗し戦場へと出た。

「何を考えているアルマっ!!」

エルリスは警戒したまま一定の距離をとっていた。

「静かにしろっ!!今はそれどころではないっ!!」

そういつた瞬間アルマは手に持っていた槍を手に短い言葉を呟きエルリスの方向へ放った。

ついに動いたかっ!!と思ったエルリスだが槍の方向が変わった・・  
・エルリスの立っている地面へと。

しかし槍は地面に刺さることなく黒い何かに吸い込まれた。

「捕らえたぞっ!!爆ぜろっ!!」

アルマの合図で黒い何かは爆発をした。

エルリスはアルマに状況を説明するように言った。

「お前は我等の周りにある鎧を不思議だと思わんか？」

その時エルリスは初めてその異変に気づいた。

「先ほどの黒いものが兵士を消していた・・それも無差別にな」

「そうか・・礼を言わせてもらおう、助かった」

「礼はいらん、我は貴様との戦いをあんなものに邪魔されたくは無かったただだからな」

「では・・決着をつけるか・・。」

「望むところだっ!!」

そしてアルマは何処からか槍を取り出し攻撃を繰り返そうとした。

エルリスは腰に提げたレイピアを抜いた。

だが二人の戦いはまた中断させられる事となった、何故なら二人の間に黒い物体が現れたからだ。

「また邪魔が入ったか・・今度は私が行くぞっ!!」

するとエルリスはレイピアの切っ先を揺らし始めた。

「全てをなぎ払え、雄雄しき風よっ!!」

エルリスは叫ぶと同時にレイピアを突き出した。レイピアの切っ先

からは大地を抉るほどの暴風が放たれた。

暴風はそのまま黒い物体を飲み込んだ。すると黒い物体にはひびが入りそのまま崩れ落ちた。

落ちた黒い欠片は溶ける様に消えた。そして風が止み土煙が晴れてきた時に黒い物体の中にあつたものが現れた。

それは、人間・・・漆黒の黒衣を着ているために顔や正確な体型が分からず性別も判断できなかった。

唯一つ見えたものと言えば、不気味に黒光りする漆黒の瞳だった。

「な、何者だっ！！」

エルリスはその者に問い掛けるが何も答えない、そこへ二人の戦いを見ていた兵士は二人の戦っていた理由が分かりその者を敵と判断した。そして兵士達は帝国、レジスタンス問わずその者へ突撃していった。

そしてその者は初めて口を開いた「影よ・・・舞え」その言葉は小さく呟かれたものであったが・・・二人の耳にはしっかりと刻まれた。

言葉が終わると同時にその者の影から太い針のような影がいくつも伸びた。

その針を見た二人・・・エルリスとアルマは怒鳴った「逃げろ」としかし判断が遅すぎた・・・場の全ての者に襲い掛かり・・・針は兵士達の鎧を水に濡れた和紙の様に貫き殺戮をした。

二人は殺戮を止めようと彼の者に迫ったが、二人の攻撃は影によって防がれた。

数十秒後影は動きを止めた。

「生き残ったんだ」

不意にその者は声を発した、それは少し幼さの残る声だった。

「もう・・・会わない様に祈っていてね」

その言葉を最後にその者は影に吸い込まれて消えた。

後に残ったのは多くの死体と二人の生存者と静寂だった。

## 第一幕

陽気な天気の下に寝転がっている青年がいた、全く持って幸せそうな寝顔をしている。

だが彼の平穏も残り数秒だろう・・・なぜならガントレットを装備しかなり怒っている女の子が立っているからだ、

「起きろおおおおっっ!!」

その言葉と共に鋼を纏った拳が青年の鳩尾あたりにめり込んだシャレにならない角度と位置と力で炸裂した拳は成人男性でさえ悶絶させることが容易かった。

しかし幸か不幸か彼は些か頑丈だった。その拳を受けても気絶することなく目を覚ましてしまったからだ、そして女の子と目を合らし・・・もう一度殴られたのであった。

「目がチカチカする」などと言って頭を抱える青年、その横で歩いているのは殴った張本人である女の子・・・実はこれは毎度の事で会ったりする。

この青年ルークは実は魔法の学校へ通っているのだが低血圧というわけでもないが朝に弱くしかもいつ何処で寝るか分からないよって遅刻や欠席をする・・・そんなルークに頭を抱えた教師が宛にしたのがルークが頻繁に寝ている場所の近くに家がありクラスメートであり生徒会と呼ばれる魔法のエキスパートで学校の風紀を守る風紀委員でもある彼女シルフィであった。

彼女は連れて来さえすれば何をしてもいいという条件でルークを起こすもといルークを殴る権利を手に入れたのであった。そして毎朝ルークの居場所を探查して見つけ出し殴り起こしているのだった。

「起こしてくれるのはありがたいんだが・・・もう少し優しく起こしてくれないか？」

懇願するルークだったがその提案はあっさりと却下された。

そうこうしている間に学校に着いた、二人はクラスへと向かった。

午前中の授業が終わった後ルークは屋上で昼食を取っていた。ルークはあまり人との付き合いが上手くは無く授業中もボーっとしていた。そんなルークに友達が出来るはずも無くいくつもルークは一人で昼食をとっている。

そしてルークは昼食を食べ終わると次の授業・・・実技の授業のために外へ出て行った。

外では何人かの生徒達が練習を始めていた。

ルークはハアーと溜息をつくと木陰に移動し寝始めた。

数分後シルフィに殴られて目を覚ます、腹を抱えながら立ち上がり生徒が全員揃っていた。

どうやら授業が始まったらしい・・・更に数分後教師の長ったらしい説明が終わり模擬戦は開始された。

ルークの相手はラウという男子だった・・・能力的にはシルフィに引けは取らないが乱暴な正確なせいで生徒会や風紀委員に採用されなかった生徒である、開始の合図でラウは地面へ手を当てた。

するとルークを囲むように氷の柱が生まれた。柱はしだいに数を増しやがて壁となった。そしてラウはそのまま壁をドームのようにしルークを氷のドームへ閉じ込めた。

数分後凍死寸前となったルークが歯をガチガチ言わせながら教師に助けられて出てきた。

そんなルークを哀れみの目で皆見ていた、普通なら負けた相手を哀れむ事はしない者達なのだが今回は違った。何故なら対戦の組み合わせがかなりの実力者のラウとクラスでもっとも弱く魔法が使えないルークだったからである。

公開処刑のような戦いだっただけでルークへの哀れみの視線がより一層強くなった。

そんな感じで学校が終わりルークは少しだるい体を引きずりながら

自分の家に久しぶりに帰った。

ルークは一人暮らしで両親はいなかった。二年前までは育ててくれたじいさんがいたが今では死んでしまっている。

ルークは水を一杯飲むとそのままベットに入り寝た。

次の日ルークはシルフィに起こされる前に起きた。もう一眠りしようかと時計を見てみると時間は十二時だった。もう昼だと言うことよりもルークはシルフィが起こしに来なかったことに驚いた。カーテンを開けてみると太陽がすっかり昇っていた。

急いで学校に向かったルークは爆音を耳にした、その音はかなり近く学校の方向から聞こえていた、

妙な胸騒ぎを覚えたルークは更に足を速めた。

ルークが学校へ着くと三つの焼死体を発見した、焼かれ方で一撃で仕留めた分限り少し感動した。

ルークが中に入ると生徒と教員が全て校庭の実技を行うための場所に集められていた。

その中にはシルフィとラウの姿もあった。

気付かれないように位置取りして見ていたルークは犯人と思われる四人の魔法使いを見つけた。

それぞれが相当な腕の持ち主のようだった。

どうしようかと考えていると犯人の方へ自分と同じぐらいの歳の女の子が歩いていった。その子は、学校の生徒というわけではないようだった。

そして驚いたことに犯人達はこの女の子に見覚えがあるようだった。「こりや驚いた・・・まさかこんな場所であんたに会えるなんてな」少し驚いたように犯人の一人が話し掛けた。だが話を遮るように女の子の背後から兵士が三十人ほど現れた。

女の子が攻撃命令を下すと兵士が犯人へと向かって行った。だが彼



女は知らなかったこの男以外の三人はいざ知らずこの男は三十人程度で倒せるような男ではなかったことを、男はニヤリと笑うと軽く詠唱した。

「我が願うは地獄の業火」

すると地面が裂けそこから勢い良く炎が噴出した。

炎は兵士を一飲みにし地中へと帰っていった。

「なっ！！力を読み間違えましたか・・・。」

悔しそうに女の子は呟いた。

「さあ・・・帝国のナイア姫、一体なんであんたがここにいるかは知らないが・・・。」『焰』の二つ名を持つ俺にたったそれだけの軍勢で勝とうなんて甘すぎだろ？」

「『焰』！？・・・なんでそんな大物がここに・・・。」

「何でだろうなあ？」

挑発めいた笑いがナイアを刺激した。

「あなたは・・・絶対に倒しますっ！！」

そう言っ取っ出したのは短いロッドだった。

「水よっ！！その奔流をもってなぎ払えっ！！」

するとナイアの背後から濁流が流れてきた。

「へえ・・・やるじゃん」

だが不意に現れた火球によって濁流は全て蒸発させられた。

「さてと・・・お返しと行くかあっ！！」

そう言っ再度火球を生み出しナイアを襲おうとした時だった。焰は詠唱を何故か止め背後へと飛び退いた。訳の分からないといった感じの三人の魔法使いだったが三人が三人とも次の瞬間何かで心臓を貫かれた。

「え？」

分からないといった感じの生徒と教員とナイア、だが焰はしっかりと相手を見据えていた。

漆黒の黒衣に異常なまでの覇気を感じさせる黒き瞳その風貌を見て全てのものが言葉を失った。

「お前は誰だ？」

しかし彼の者は何も答えない、焰も軽く微笑むと次の瞬間剥き出しの殺意を露にした。だが彼の者は全く動じない、それどころか何故かこの雰囲気を楽しんでいるような気さえしてしまいそうになる。

「何ももう聞かないぜ・・・どうせここでお前は・・・死ぬんだからなっ！！」

そう言つて焰は唱え出した。

「地獄の業火を超えた冥府の劫火よっ！！我が前に立ちふさがる愚かなる者を・・・殲滅せよっ！！」

そう言つて焰の体から纏わり着くようにして紫の炎が表れた。炎は見るだけで生気を失いそうになるほど禍々しさを持っていた。

「消えちまえっ！！」

掛け声同時に紫の炎が彼の者を焼き尽くそうとした。だが彼の者は全く動かなかった。

そして炎が直撃した・・・だが彼の者は平然と炎の中で立っていた。「この程度の炎が・・・冥府の炎か・・・」

その言葉はどこか悲しそうだった、焰は自分の最大級の攻撃が全く聞いていないことに驚き彼もまた相手の実力を読み違えてしまったと後悔した。

「死神の裁き」

彼の者がそう唱えると影より三体の死神のような者が現れた。焰は逃げようとしたが何故か体が動かなかった。背後を見ると黒い十字架にいつの間にか張り付けにされていることに気がついた、そして焰は三体の死神によつて数十個もの肉隗へと解体された。全てを目撃した後軽く笑つて彼の者は消えた。

戦闘が終わりナイアは学校の一室を借りて休んでいた。

「何なの・・・何なのよあいつ・・・」

そう言つてナイアは思い出しただけでも寒気がするといった感じで顔を真つ青にしていた。

そんなナイアの所にルークはココアを持って現れた。

「大丈夫ですか？」

差し出されたココアを受け取り軽く礼を言つてココアをすすつた。

何故かココアは不安な気持ちを温めてくれた。

ナイアはそこで深く考えるのをやめた。何故なら他にやることがあったからだ、皇帝である父親への報告書である。いつもはあまり書くことは無いが今日は違った。三十人の兵隊を焔に会つて全滅させられたことと、その焔を漆黒の黒衣を来た何者かが倒したこと。それを書かなければならなかった。

そして報告書を書き終えナイアは自分がここへ来たことを説明しようとして部屋から出て行つた。

## 第二幕

ナイアは魔法学校の生徒と教員を体育館のような広い施設に集めた。壇上に上がるナイアを全ての人が注目した。そしてナイアは決意したように話し始めた。

「私は戦闘国家レーデンの第二王女ナイアです。このような場を借りて挨拶することをお許しください……。今回私がこの土地へ来た理由は、先日この近くの平野で私の国の部隊とレジスタンスの部隊が交戦し連絡が途絶えてしまったからです。普通はそのような事態が起きたとしても部隊が壊滅したと言う事で済ませるのですが、その部隊を指揮していた者と言うのが私の国の四大将軍が一人『朱雀』のアルマなのです。彼に限って負けることはありませんがもしかしたら手傷を負っているかもしれないと言うわけで来たのです……。ですが私の守護のために着いて来た兵士達は皆先の戦いで死んでしまいました。そこでお願いがあるのです、生徒か教員の方の中で手伝いをしてくださる方はいませんか？」

そう言つてナイアは口を閉じた。だが語られた話はおおよそ信じられない話であつた、そんな困惑した人々の中シルフィが教員の近くへ行き「私がやります」と言つた。

その言葉に釣られたのか実力のある生徒が次々と参加を希望した。純粋な気持ちからやろうと思つたものもいたが多くのものは下心が見え隠れしていた。

しかしまだ世間と言うものをあまり知らないこの姫君は、素直にこの誠意を喜んだ。

そんな中シルフィがルークに言つた。「あなたも来なさい」と始めは渋っていたが、殴られそうになつたのでルークは「わかつた」と小さく言つた。

そしてその後出発の時間を決めた、出発は夕方だった。

夕方ルークは水などを適当にバックに放り込み集合場所へと急いだ。集合場所には多くの人が集まっていた。その中には、やはりシルフィの姿もあつたついでにラウの姿も、参加した生徒の数は三十六人その一人を除いたほぼ全ての者が卓越した魔法の腕を持っていた。戦力的には十分といえた。

そして護衛対象であるナイア自身も負けず劣らずといった実力を持っていた。食料も馬車に積み終え一行は戦闘のあつた平野へと向かった。平野までの道のりは九十キロほどだった。

1日目は軽く歩いて十キロほど進むと考えて二日目からは二十五キロペースで歩くとして五日目に着く計算となつた。

そして計算通り十キロほど歩いたところで一行は夜を明かした。

二日目一行は道無き道を進んでいた。所々に馬車を通れないところを魔法などで開拓し進んでいった。

昼頃には道は拓けて来た、だが事件はその時に起きた。

いち早く気が付いたのはシルフィだった。空の風に異変を感じ見上げてみると空にワイバーンと呼ばれるような前足の無い小型のドラゴンが現れたのだ。一行は魔法を唱え始めたがワイバーンは速かつた。俗には、速すぎて遅く見えるなどと言う言葉があるがそれは違う速すぎると消えてしまうのだ。

一陣の風となつたワイバーンはあろう事かナイアに襲い掛かった。大木をやすやす噛み千切る顎に襲われそうになるナイアだったが突如ワイバーンの左目に礫つぶてがあたつた。進む方向が少しズレ地面に頭からダイブするワイバーン動きが止まったのを見計らい生徒達はありつたけの魔法をワイバーンにぶつけた、水や火や雷などが猛威を奮いワイバーンをこの世から消滅させた。

そしてようやくナイアは気が付いた。礫を投げたのがルークだと言うことにだが生徒はそのルークの絶技に全く気付いていなかった。それどころかナイアがワイバーンを地面に叩き落したのだと勘違い

さえしていた。そのことについて問いかけようとルークのところに行こうとしたがルークはシルフィに呼ばれ片付けに行き、ナイアは「先ほど技は何なのか」など質問攻めにあっていた。「ルークが礫でやったのだ」と答えたが笑って返された。

そして二日目も終わりを告げた。

三日目はそこまで酷い道でもなく今までの中では天国のようだった。りんごを齧<sup>かじ</sup>りながらルークはみんなの後をついていっていた。

そして四日目何故か三日目にかなりの距離を進んでしまい目的地まで十五ほどとなっていた。そのことを生徒へ伝えるとなら今日中に行ってしまうという事になった。少し進むのが速くなる一行そして一行は目的地へとついた。

目的地はまるで地獄だった、見渡す限りに腐乱した敵味方の兵士達の死体と黒く濁った血の痕があった。その光景には流石のシルフィとラウさえも目を覆い顔を青くした。

だがそこでナイアはあることに気が付いた、それは敵味方とも同じような傷跡が鎧に付いているということだ。少し考え込んだナイアだがルークが「その將軍さん・・・大丈夫かな」と呟いたのでナイアはすぐさま考えるのを止めアルマを探した。

アルマの姿は何処にも無かった、そこでナイアは奇妙な安心感を覚えた。それは『アルマが死体の中には無く生きている』という気持ちと『ならどうして連絡が途絶えたのか?』という気持ちからだっ

た。

その夜一行は死者達の墓を作り、そこで一夜を明かすことにした。テントを張り終わり料理を作ろうとしたときだった。急に突風が吹き荒れテントを吹き飛ばした。

何が起こったのか訳もわからず生徒達は困惑した。そして月明かりに照らされて十数匹ものワイバーンが現れた。十数匹ものワイバー

ンの無慈悲なる爪や牙が一行に襲い掛かろうとしたときだった。

「生まれろ、氷の双壁よ」

ラウがそう唱えると氷の壁がワイバーンの前に二枚立ちはだかった。続けてシルフィが

「歌い、踊り、狂えっ！！風の大牙よっ！！」

そして形成されたいくつもの風の刃がワイバーンを襲った。

つまり冷静になればそれほど驚異的な敵ではなかったのである、敵は防御力の高い敵というわけではないただ速さがあるだけの敵なのである。

何処か外来種であるヘルワイバーンやロックワイバーンならともかく通常のワイバーンなんて物の数ではない、したがって動きを一瞬でも止めその隙をつけば難なく倒せる敵なのである。

そしてワイバーンとの戦いは終わった。奇跡的に手傷を負ったものはおらず皆無事だった。

その時忍び寄る気配を風を通じて感じたシルフィがその存在に向かって風を放った。

だが風は目標に近づくにつれ弱くなり最終的に微風となった。

「なかなか面白い歓迎だね」

そう言って現れたのはレジスタンスのリーダーエルリスだった。

### 第三幕

「エルリス！？レジスタンスのリーダーが何故ここに……。」「

ナイアは驚きつつも攻撃態勢をとった。

「アルマ殿を預かっている、付いて来なさい」

そういうとエルリスは身を翻し戻っていった。

「戻るか？」

ラウが目を細めてエルリスの行った方向を眺める。

「戻かどうかは行ってみないと分からないし……。とりあえず行かないか？」

ルークがそう言うのと肯定の返事がちらほら上がり、一行は付いていくことに決めた。

エルリスと微妙な距離を取りつつ付いて行くと突然少し離れたところでエルリスは止まった。

そして何も無い空間に手を差し出すと”ギィ”っという音と共に空間に穴が空いた。するとその空いた周りが次第に色をもち始め扉が見え、壁が見え、巨大な建造物が見えた。

エルリスは振り返り一行にこう告げた。

「ようこそ……。レジスタンスの本拠地『インビジブルガーデン』へ」

一行は誘われるままに建造物へと入っていった。

そしてそのまま一つの部屋に案内された。エルリスは扉を開けて招き入れる。部屋にはいくつかベットが置かれてありその一つに包帯を巻いた男がベットの上で本を読んでいた。

「アルマッ！！」

ナイアは叫ぶと共に駆け寄った。アルマも声に気付き一礼する。

「姫……。何故このようなところに……。」「

アルマは何故か悲しそうな顔をしていた。

「何故って……。お父様が捜索隊のリーダーに私を選んだの」



「皇帝は何故姫を……」

「それは……」

何かを言おうとしてナイアは口を閉じた。アルマもそれ以上追求をしようとしなかった。しばらく沈黙が続きナイアが口を開いた。

「しかし何故その傷を負ったのですか？やはりエルリスに……」  
そう言つてナイアはエルリスに睨んだ。

「いえ……今回の私の傷や兵達の全滅には、最初の戦い以外レジスタンスは関与していません。」

「意味がよく分かりません……あなたの部隊の任務はレジスタンスの討伐だったはずです。」

「それについては私から話しましょう」

今まで部屋の外にいたエルリスや生徒が入ってきた。

「ではアルマ……動けますか？」

「ああ……行ける」

アルマはエルリスの肩に寄りかかりながら歩き一行もそれに付いていった。少し歩くとかなり広い空間にたどり着いた。そこには微妙に服装や鎧の違う多くのレジスタンスの兵士達が集められていた。

「少し行つてきます、君達はここにいてください」

と言い残しエルリス空間の中央に向かって行つた。

「皆も今日ここに連れてこられたのは驚いていると思います……ですが聞いてくださいもしかしたらこの中の何人かは噂で聞いたことがあるかもしれません、数週間前この近くで帝国軍との戦闘がありました。」

そして激突し合うアルマの帝国軍とエルリスのレジスタンスが鮮明に映像として映し出された。どうやら魔法で記憶を映像にしているようだ。

「この帝国軍を指揮していた者は彼の帝国軍の猛将『朱雀』のアルマでした。そしてレジスタンスを指揮していたのはこの私でした。そして私は全ての兵を失つて敗北しました。」

一瞬兵士達にどよめきが走る。

「ですが普通の戦闘で敗北しただけならば皆さんを呼ぶようなことはしません」

そしてナイアとアルマの方向へ向き

「ここで問題なのは帝国軍も全ての兵を失った事です。」

兵士達は意味が分からないといった様子だった。

「実は帝国軍の本隊とレジスタンスの本隊がぶつかる前に第三者の介入がありました。」

そして映像が変わった時ナイアは驚愕した。

「嘘・・・なんであいつがここに」

掠れた様な声だがアルマにはしっかりと聞こえた。だがここでは聞いたさうとしなかった。

その映像とは漆黒の黒衣に身を包んだ者が黒い塊から出てきた映像だった。

「問題はここです・・・この漆黒の者が正体を現したことで帝国軍とレジスタンス双方の兵士が勢いづきこの者に襲い掛かった場面です。見てみてください」

そして次に映し出されたのは影から出た針が兵士達を次々と貫いていくという惨劇だった。

「結果がこれです、憶測ですがこの者は闇系統の魔法を使おうです。だが皆さん知つてのとおり闇系統の魔法は珍しい、私も今回始めてみた。一体どのような攻撃を仕掛けてくるか分からないが一つだけ皆さんに忠告をします・・・奴に会ったら逃げてください」

話が終わると兵士達は黙り込んだ、皆どうすればいいのか分からない様子だった。

そして解散の前にエルリスは一言付け足した。

「それと奴に生半可な魔法は通じないから絶対立ち向かおうとしないように・・・じゃあ解散です」

兵士達の足取りは・・・重かった。

兵士達が続々と帰っていく中ナイアと魔法学校の生徒達は取り残されていた。

そこへエルリスが戻ってきた。エルリスの後ろには生徒達と同年代と思われる青年と女の子がついていた。

「さて、さっきの説明で分かったと思いますが・・・アルマの怪我は闇の魔法使いが原因です。」

「それは分かりました・・・しかし疑問が残ります。何故あなたはアルマを助けたのですか？」

エルリスは少し考えるような仕草をしてから言った。

「なんとなくです」

何の答えにもなっていなかったがしぶしぶナイアは引き下がった。

「おお、そうだ忘れていました。先ほどから私の後ろにいる青年はルウ、女の子の方はメイ、二人ともレジスタンスの構成員で戦闘の腕だけならそこら辺の部隊長にも負けません・・・だが世間というものを知らなすぎなので、この機会にアルマを帝国に送る際の護衛として連れて行ってくれませんか？」

突然の申し出に驚いたナイアだがどうすればいいか分からなくなりアルマに目でどうしたらいいか問い掛けた。

「連れて行く分にはいいと思います。」

アルマがそう言ったのでナイアも了承した。

「では二人とも外の世界でしっかり勉強してきなさい」

エルリスの言葉に二人はしっかりと頷いた。

二人を連れて戻ろうとした時に連れてナイアは先ほど伝えようとしたことを思い出しエルリスに告げた。

「そういえば先ほどの話で出た闇の魔法使いですが・・・この近くの村の魔法学校で五日ほど前に現れましたよ？」

その話を聞いてエルリスは詳しく教えてくれと頼んだ。

そしてナイアは焰と名乗る男に三十人の兵士を焼き尽くされたこととその後に出てきた闇の魔法使いが焰を簡単に殺したことを継げた。

「影から死神・・・そんなことも出来るのですか・・・」

エルリスはブツブツ言いながら何処かへ行ってしまった。

残ったナイアとアルマとルウとメイと背後で集まっている魔法学校

の生徒は、呆然とその様子を見詰めていた。

その時だった。緊急時になるようなサイレンが鳴り響いたのは、それと同時に急を知らせる放送が聞こえてきた。

『現在グリフォンと思われるモンスターの大量と大型のモンスター五体がこのインビジブルガーデンの上空で確認されました。戦闘員は至急第三ゲートへ集まってください。なお非戦闘員はシエルターへの非難を急いでください』

その放送を聞いたときアルマの顔色が変わった。

「グリフォンだと！？ならば大型のモンスターというのはブルードラゴンかつー！」

ドラゴン・・・モンスターの中でも最も討伐の大変なモンスターの一つで、鋼よりも固い鱗と万物を引き裂く強靱な牙と爪を持つ大型モンスター

アルマは動かぬ体無理やり動かし外へ行こうとした。だがやはり無理があるのか数メートル進んだところで倒れてしまった。

「アルマ無理をしないでください、戦闘は私からですから」

そう言っただけは行こうとしたがシルフィに止められた。

「ナイアさん、一人で行くつもり？」

変わるようにしてラウも言った。

「一人よりも皆で行ったほうが戦力になるだろ？」

そうしてラウは後ろを向き生徒達の方を見るが生徒達は顔を青ざめ首を横に振っていた。

「・・・情けねえ・・・。」

そう呟くとラウは「まあ一人よりも三人の方がいないよりはマシだよな」とナイアに言った。

そこで口を挟むようにしてルウが三人に言った。

「じゃあ僕達も行きます。レジスタンスの問題ですし」

そしてメイも頷いた。

「そうと決まれば行こうぜ・・・って第三ゲートって何処だ？」

「こっちですついて来て下さい」

三人はルウとメイに誘われるがままについて行つた。

その様子を見ていたルークがボソツと呟いた。

「全く・・・どうしてあいつ等は危険が好きなんだよ・・・しかし  
流石にブルードラゴンが五体も相手となると加勢が必要だよな・・・」

そしてルークは誰にもばれないように何処かへ消え懷から漆黒の黒衣を取り出した。

## 第四幕

第三ゲートには、何百人もの兵士達が集まっていた。ナイア、シルフィ、ラウ、ルウ、メイもその中に混ざっていた。

そして少し怖いスキンヘッドの男が作戦の説明を始めた。

「敵のグリフオンの数は四百弱・・・こいつ等は気を付けてさえいれば楽に勝てる相手だが・・・問題は先ほどの放送であった大型のモンスター五体のほうだ、調べた結果やはりブルードラゴンだということが分かった。皆分かっていると思うがブルードラゴンの最大の特徴は雷のブレスだ。そしてブルードラゴンには生半可な武器では傷さえも付けられない、よってブルードラゴンの相手は各支部の隊長と副隊長クラスと魔法の使える者がやることとなる。よって魔法の使える者でブルードラゴンと戦っても良いという者は私のところへ来い、以上だ」

そしてスキンヘッドの男の近くに人が集っていった。

「私たちも行こう。」

シルフィがそう言うのとルウとメイが止めた。

「それは駄目です。流石にブルードラゴンの相手は無理です。」

「そうですね！！私たちは、エルリス様からあなた方の護衛を頼まれているんです。グリフォンならともかくブルードラゴンが相手だとそんな暇はおるかこちらが先に死んでしまいます。」

あまりの勢いに押されたシルフィだがこんなことでは流石に引き下がらなかった。

「違うわ、あなた達が護衛を頼まれたのは私たちではなくナイアとアルマだけのはずよ。」

そこへラウが口を挟んだ

「でも自殺願望者を止めるのは普通だと思っぜ？」

「ラウ・・・あんたもそっちの味方なの？」

「敵味方の話じゃない、いくら俺たちが才能を持っているとしても

それは同年代での話だろ？しかも俺たちはドラゴンの千分の一ぐらいの強さのワイバーンでさえ多少てこずったんだ。簡単に言つとドラゴンの力は俺たちから見れば規格外なんだよ。」

そこにはいつものふざけているラウの面影は無く真剣そのものだった。

「でも・・・。」

「でもじゃねえ、俺たちは俺たちのできることをするそれで良いんじゃないか？」

そう言つてラウはいつもの顔に戻った。

「そうですよシルフィ私たちの出来ることを・・・しましょう」

ナイアも諭すように言つとシルフィは渋々ながら頷いた。

丁度その時第三ゲートのゲートが開いた。

「始まるみたいだな・・・よし固まっていこうぜ」

ラウがそう言つと皆が頷いた。

そしてスキンヘッドの男と隊長、副隊長クラスの者や魔法使いの者達が先行して出て行つた。遅れること十数秒他の兵士達も出て行つた。

外に出たルウとメイ以外の三人は圧倒された。空を覆う黒い影の大群、そして先行した者達が向かつて行つたところに光り輝いた青白い閃光、その全てに三人は圧倒されたのだ。

ねつとりとした唾が口の中に纏わりつき喉がカラカラに干からびる。そして三人は氣付いた。

『これが本当の戦いなのだと』

しかしボーツとしている暇を相手はあまり与えてはくれなかった。空から降りかかるグリフォンの爪が地上の兵士達に襲い掛かった。シルフィはすぐに我に帰りガントレットをガリッと合わせる。ナイアは短いロッドを手に持ち、ラウは短い棒を懐から取り出し組み合

わせ戟を作り出す。ルウは赤と青の双剣を取り出し、メイは気合が出るからと言ってマントを羽織った。

シルフィは軽く詠唱をした。

「我は風・・・風は我・・・我に風の恩恵を」

そう言うとしルフィの体が浮いた。シルフィはそのままグリフォンに向かっていきすれ違い様に二匹のグリフォンを殴った。

物凄い音を響かせながらめり込んだ拳は一発だった、だがグリフォンの体には、三発殴られた後があった。

「風の恩恵って速度も上げるのか・・・いいなあ」

などとラウがぼやいているとグリフォンが前後左右と頭上の五方向から襲い掛かってきた。

ラウは櫓をまわして前方のグリフォンの首を刈り取り勢いをそのままにして右側のグリフォンの首も刈り取った。

一回転させた時前後左右のグリフォンの首が宙に舞った。だが頭上からのグリフォンが数センチの所まで迫っていた。

「あゝらよつと」

気が抜けるような声と共に横に避ける同時に地面にグリフォンが落ちてきた。そしてブオンという風を切る音と同時にグリフォンが腹から真つ二つになっていた。

その頃ナイアはたった一体のグリフォンに対して

「水よっ！！その奔流をもつてなぎ払えっ！！」

などと言う大技を使い味方もと敵をなぎ払っていた。

その様子をやれやれといった感じで見ているルウとメイの周りには血だまりが出来ており、そこにまた七体のグリフォンがやってきた。

「じゃあルウ次のグリフォンで多く倒せた方に少なかった方がアイスおごるなんてどう？」

「戦いを賭けにしちゃ駄目だろ？」

「よいスタート」

「だから聞けって・・・まあいいか」

そう言つてメイはマントをはためかせる。するとマントにあたった



二体のグリフォンがズタズタに切り裂かれる。どうやらマントに何らかの秘密があるらしい、そこヘルウがメイの肩を叩く。

「こっちは終わったよ」

ルウの背後には五体のグリフォンが細切れになっていた。

「また負けたあ・・・。」

そう言つてまた無駄に勝負を挑んだりするのだった。

もはや勝負は歴然だった。多少傷付いた者はいるものの死んでいるもののいないこちらに対し、ほぼ全滅に近いグリフォン・・・勝負は決まったと思われた・・・だがそこに一体巨大な青いモノが舞い降りた。

それを目にした兵士達は喉が壊れんばかりに叫んだ。

「ブルードラゴンだっ！！！！」  
と・・・。

ブルードラゴンは所々傷を負っていた、だがどれも致命傷とは程遠いものばかりだった。

そしてブルードラゴンは大きく息を溜めた。

「やばい・・・。」

逃げようとした兵士達だがその瞬間ブルードラゴンの口に溜められていたものが吐かれた。

雷のブレス・・・それは人間など脆い生物は一瞬でこの世から排除してしまうほどの威力を持っていた。

大地を削り、大気を痺れさせ、生きるものを消失させるそのブレスが吐かれた時、何十人も兵士達の命がこの世から消えた。

目の前で起こった殺戮に釘付けになる三人だがルウとメイが三人を我に帰らせる。

「逃げるぞっ！！」

最初は理解が出来なかった。だんだん頭が戻ってくるに連れて三人

は動揺する。

「逃げるって何処に！？あのプレス見たでしょ！！あれじゃ・・・何処にも逃げられやしないわっ！！」

そう吐き捨てたシルフィをルウが叩いた。

「自分をしっかり持てそんなことを言うな」

そしてルウがシルフィを抱える様に持ち五人は逃げようとした。

だがその時一瞬ルウは気付いた。こちらにプレスを撃とうとしている事に「動け」と足に命令しているのに全く動かない・・・だがそれはルウだけではなかった。他の三人も動けなくなっていたのだ。初めて感じる濃厚な死の恐怖、そして雷のプレスが五人に向かって吐き出された。

思わず目を瞑る五人、次の一瞬に襲い掛かる死の痛みを忘れたいと言うように目を瞑った。

数秒たった。その時ルウはおかしい感じた、何故なら痛みが来ないからだ。もしかしたら痛みも感じないほど一瞬にして死んでしまったのではないか？そう思っただけ目を明けると黒い壁が立ちふさがっていた。

『何だこれは？』理解できない現実が頭の中で暴れ回る『冷静になれ』と言い聞かせてなお頭は冷静にならない。

コツン背後から足音が聞こえた。コツンまた聞こえた。

振り返りたかったが同時に振り返りたくなかった。

何故なら背後に這いずり回る悪寒があったからだ。

胸が痛い・・・心臓が驚愕にされているように痛い。

だがなお足音は続く・・・。

新しい感情が生まれる・・・死にたい・・・ここに居る位ならプレスを浴びて死にたい・・・。

そして足音が真横を通り過ぎる。

姿を見ようと横目で見た時だった。

深淵のように深く暗い瞳・・・見ているだけで生命力が根こそぎ奪われていく。

そいつは壁に軽く触れるすると壁は幻の様に溶けて消えた。  
そしてルウはようやく理解した。

こいつが例の闇の魔法使いで・・・絶対に逆らってはいけない絶対的な力を有した存在だと言うことを

輪郭はぼやけてはつきりと分らないがルウは確信を持ってこいつが男であり同年代ぐらいの青年だということを感じた。

そいつが声を発した。

思ったとおり若い声男の声だった。言葉は詠唱のようだった。だが詠唱と呼ぶには些か短い気がした。

「影よ・・・舞え」

確かこの詠唱・・・映像の・・・。

そこで考えは中断された、もしこの詠唱が映像のものならドラゴンはおるかここにいる全ての人間が死に至るからだ。

だが予想は大きく裏切られた。

一箇所に収束した影の針はワインの栓などを明けるような円を描く針となり、回転するようにブルードラゴンに襲い掛かった。

だがブルードラゴンも馬鹿ではなかったそれを空へ飛び上がり回避したのだ。ところが針はブルードラゴンを追うように空に伸び翼を貫いたのだった。

そして浮力を失ったブルードラゴンは墜落した。そこに影の針がバラバラに戻りブルードラゴンを貫いた。と思われたがブルードラゴンの鱗に阻まれ傷つけることが出来なかった。

それを見たブルードラゴンは這うように彼に襲い掛かった。

だが彼は影の針を消した。

「死神の裁き」

と詠唱すると同時に続けて

「断罪の鎌」

と唱えた

すると影から三体の死神が現れた。そして後を追うように死神たちが持つ鎌よりもかなり大きく禍々しさを持つ鎌が現れた。

彼はそれはもつとニヤリと笑った。

それを見たルウは寒気が走った。

そして地面を蹴り死神と一緒にブルードラゴンへ向かって行った。

死神が鎌で牽制する中彼は大きく振りかぶった。

グチャアと言う赤い血飛沫と肉が斬れる音と共に左肩から右側の腰

にかけて彼は鎌を振り切った。

ほぼ真つ二つに斬れたブルードラゴンはすでに事切れていた。

死神が更に解体しようと鎌を振りかぶるが彼はそれを止めた

そして死神を帰らせるとブルードラゴンの下に黒い穴が現れた。

沈むようにブルードラゴンは穴に飲み込まれ・・・消えた。

そいつはついでにグリフォンの死骸の片付けもしたようで戦闘のあった場所には何も残っていなかった。

そしてそいつは影に沈んで消えていった。

「終わったのか・・・？」

信じられないと言った様子で声に出すルウだがそれはルウだけではなかった。

メイ、シルフィ、ナイア、ラウなど生き残った者全てが驚きを隠せないでいた。

不意にメイがルウ袖を引っ張り

「とりあえず帰ろうか」

と言ったので五人はインビジブルガーデンへ帰っていった。

## 第五幕

とりあえず五人はアルマの所に戻っていた、先ほど少し無理に動いたので傷が開いてしまっているアルマだったが意外と元気そうだった。

そこにルークが入って来た。

「他の皆は、ここを出る準備が出来たぜ。看病は俺がしてるから荷物の整理でもしてきたらどうだ？」

ルウとメイは護衛の準備は整っているらしく大丈夫と言っていた。だが他の三人は準備が出来ていなかったらしく荷物を準備しに皆のところへいつて行った。

しばらく沈黙が続き・・・ルークは気付いたように喋りだした。

「そういえば自己紹介がまだだったっけ？俺はルーク、さっきいたシルフィって女の子に引きずられるようにここまで荷物持ちやら雑用を任された可哀相な青少年です。一応あいつ等と同じ魔法学校の生徒です」

啞然とした三人だったが不意にアルマが笑い出した。

「くつくつく・・・なかなか愉快な者だな。我はアルマ、姫より聞いていると思うが一応『朱雀』という、二つ名を持っている。もっとも今はただのお荷物の怪我人だがな」

なにやら紹介をしなければいけないような雰囲気になったのでルウとメイも自己紹介をはじめた。

「僕はルウ、レジスタンスのメンバーですがアルマさんを無事にレィデンまで送るようにエルリス様から護衛を任されたものです。」

「私はメイ、ルウと同じでアルマさんの護衛を任された一人です。」  
一通り挨拶が終わりルークがおもむろに懷から紙を出した。そこには女の子の絵が書かれていた。

「質問なんです、この娘を見たことはありませんか？名前はリーンっていう娘なんです。あつ！！もしかしたらこの絵よりももう少し

成長しているかもしれないですが……。」

三人は覗き込むように絵を見た……。だが首を振った。

「そうですか……。変なこと聞いてすみませんね」

少し苦笑ぎみに笑ったルークにアルマは話し掛ける。

「その娘……。リーンとか言ったかな、そのこと君はどういう関係なんだい？」

するとルークは遠くを見詰めるような目をしてゆっくりと語った。

「俺が初めて……。初めて守りたい、ずっと一緒にいたい、そう思った娘です。」

「わかった……。レーデンへ着いたら部下に命じて探させよう、だが聞かせてくれもし見つからなかった場合は君はどうする？」

その言葉にルークは即答する。

「何年掛かっても探し出します。その娘を探し出す為なら俺はどんな事だってやってみせる、汚い仕事だっていくらだってやってやる、命差し出せと言われたら差し出してみせる。」

ルークの目に宿った本気の瞳、翠の瞳が一瞬黒くなったように思えた。

「その決意……。しかと受け取った。その心を忘れるな……。ところでふと思ったのだが、君は何故紙に書いて見せるんだ？魔法で映し出せばより鮮明に分かるはずだが……。」

その質問に困ったように答えた。

「実は俺、魔法が使えないんです。」

ルークの言葉に三人は固まった。無理もないだろう、魔法学校という所は文字通り魔法を教えるところで、詠唱などは始めに系統ごとに教える教員が替わりはするが、映像を映し出したり、動かない物体を宙に浮かせたりするどの系統にも属さずどの系統でも使える基本魔法と呼ばれる魔法は関係なしに教えられるものなのだ、それが使えないと言うことは魔力がない……。つまり魔法が使えないと言うことであってルークの言ったことは単純明解なわけだ。だが魔法が使えないと言うことは、魔法学校の生徒としては、あってはなら

ないことであり三人は単純に驚いて固まったわけだ。

硬直することおよそ三十秒いち早く精神の世界から帰ってきたアルマはルークに疑問をぶつけた。

「ではどうやって魔法学校に入った!？」

「うゝん・・・何ででしょうか？」

あいまいな言葉を話すルークにアルマは少し苛立ちを覚えつつもう一度聞こうとしたときだった。

ガチャっという音とともにエルリスが入ってきたのだ。

「アルマ傷の具合・・・ん？どうしたんですか？」

苦笑した青年が一人と青年に少し苛立ちながら喋ろうとするアルマ、その後ろで固まっているルウとメイおおよそ何があったのか見当もつかないエルリスが呆然としていると

「あっ!!エルリスさんが来たみたいですのでお邪魔になるといけないんで帰りますね」

そういう残してルークは素早く部屋から出て行った。

「待てっ!!」

とアルマが言った時には足音がかなり遠のいていた。

「すみませんアルマ・・・状況が読めないのですが」

「気にするな、それよりエルリス何故ここに来た？」

「ああ伝えたいことがありました・・・また闇の魔法使いが出でました」

「何処に出たっ!？被害は!？」

「出た場所は先ほどの戦闘が行われた場所で・・・被害はこちら側にはありません。」

「こちら側？」

「今回奴の犠牲となった者はブルードラゴン一体で、それも驚いたことに奴はルウ達五人を庇うようにしてブルードラゴンの雷のブレスを防いだそうです。その後奴は傷一つ負うことなくブルードラゴンをたった一人で倒したらしいです。」

「ブルードラゴンをたった一人で・・・傷一つ負わずに・・・と言

うことは奴の実力は少なくとも我やお前と同等はあると言う事が・  
・。」

「そうみたいですわね・・・今部下達に奴の正体について調べさせて  
いるところですが、あまり期待はしないほうがいいでしょう」

二人は溜息を吐く

「今のところ奴の行動は不可解すぎるな」

「ああ・・・私の部下とあなたの部下それらを殲滅したと思ったら、  
今度は私たちを助ける・・・。」

「敵が味方か・・・あるいはそのどちらでもないか・・・。」

「ですが結論を出すにはまだ早いですわね」

「そうだな・・・ところでそこに固まっているお前の部下・・・こ  
ちらへ呼び戻さなくていいのか？」

「あつ、忘れてました」

そういつてエルリスは二人に近寄ると声をかける。

「二人とも起きなさい・・・というよりも帰ってきなさい」

何度か呼びかけているうちに二人が動き出した。そして動き出すな  
りルウが声をあげた。

「エルリス様っ！！・・・ル、ルークは何処に・・・。」

「その前に状況を説明して欲しいんですがね」

代わる様にメイが話し始めた。

「ルークが魔法使えなくて、でも魔法学校の生徒で・・・。」

「良く分かりませんが・・・まだ詠唱を覚えてないのでは？」

「違うんですっ！！基本魔法が使えないんです」

”そんな馬鹿な”という目でアルマを見るがアルマは頷くばかりだ  
った。

「それは・・・ありえませんか、どんな魔法学校への入学にしても  
魔力があることが絶対条件ですし・・・。」

「僕とメイがルークについて皆から聞いてみます。」

「・・・頼みました。ですが決して無理はするんじゃないありませ  
んよ、あなたはもちろんそのルークという青年に対してもね、では



そろそろ荷物を持って第一ゲートへ行きなさい、あなた達以外にはもう伝えましたから」

「「わかりました」」

と息を合わせて返事をして二人は部屋を出て行った。

「さてアルマ、あなたもその青年には注意を払っていてくださいね」

「言われるまでもないわ」

そう言っただけの体を起こしてよたよたとアルマは歩いていった。

「ホントに・・・何も怒らなければ良いんですがね」

## 第六幕

アルマが第一ゲートに着いたときには全生徒の用意が整っていた。アルマはラウとシルフィに支えられながら馬車に乗せられた。

「アルマさんはここで休んでいてください」

そう言うときシルフィとラウは荷物の積み込み作業をしようと皆のところに同行こうとした。

「二人ともちよつと待ってくれ」

アルマに呼び止められ二人は振り返る

「どうしたんですか？」

「戦いたいななんて駄目だぜ？」

「いや違う、少しばかり君達に聞きたいことがあってな・・・ルークという青年を知っているな？」

「ルーク？ ああ、あの寝ぼすけのことですか・・・何か失礼なことでもしました？」

「でもルークはいつも寝ているが比較的無害だからそれは無いんじゃないか？」

「知っていると言うことでいいんだ・・・実はルークが魔法を使えないということが本当かどうか知りたいのだ」

「・・・」

シルフィは無言で押し黙った。

「そういえばそんなこと聞いたことあるな・・・この前の模擬戦も何にも使ってこなかったし、でも今一番ルークの身近な存在はシルフィだしシルフィは何か知らないか？」

「・・・」

「おい・・・どうした？」

「・・・」

「なにやら迷っていることがありそうだな」

「・・・」

「良かったら話してくれないか？」

するとシルフィは言葉を紡ぎ始めた

「これから言うことは、ここだけの秘密と言う約束をしてくださるなら」

二人は頷いた。

「もしかしたら見間違えかもしれませんが・・・これは、四年前で私とルークが顔見知りではなかった時の話です。当時の私は親の使いで隣村まで行くところでした、その時町外れにあるルークの家の前でルークとルークのおじいさんが話しているのを見ていました。ルークは何かの絵を握り締めてリーンとか言いながら泣いていたんです。その時本当にこれは見間違えかもしれないんですがルークの翠の瞳が黒くなっていたんです・・・。」

「おい・・・それって・・・。」

「ルークの正体が闇の魔法使いということか？」

「核心はありません・・・でも・・・。」

「それと・・・リーンと言っていたのだな？」

「確かに言っていました」

「わかった・・・協力に感謝する、出来ればそちらから探りを入れてもらうとありがたい」

二人は頷いて答えた。

三人が話を終えると荷物の積み込みが終わっており今まさに出発しようとしていた。

「では行きましょう」

というナイアの合図で一行は自分達の村への帰路を進んでいた。途中ゴブリンと呼ばれる醜い人型のモンスターに襲われたが、まったく問題なく進んでいた。

二日、三日、四日と嵐の前の静けさを思わせるような静寂な日々が続いた。

五日目少し遅くなってしまったが村がそろそろ見えるだろうというところまで来た。

遠くの方で村の方から黒い煙が立ち昇っていたので一行は自分達のために祭りでもやってくれていると思っていた・・・近くに行くまでは、それは村が黙視できるところまで来た時の事だ・・・村の光景に一行は啞然とする、家が潰され、魔法学校は所々に穴が空いておりいつ崩れてもおかしくはない状態で、一番目に留まった光景は真ん中に積み上げられた人の死骸の“塔”だった。

そして生徒達一行が生まれ育った村は・・・壊滅した。村の魔法学校跡地へ集まった一行・・・生徒達の中には両親を失ったショックで泣きじゃくるものは少なくはなかった。

シルフィは涙こそ浮かべはするものの流すまいと頑張っていた、ラウは黙々と死骸の“塔”の死体を供養して埋めていた。

ナイアとアルマはラウの手伝いをしていた。

全ての死体を埋めるのに殆ど一昼夜使ってしまった暗くなっていた空は明るくなり始めていた。

一晩経ち少し落ち着きを取り戻してきた生徒達を次なる不安が襲ってきた。

それは、帰る場所がないと言うことだった・・・だがもつと恐ろしいこともあった、それはこの村を壊滅させた奴がいつまた責めてくるか解らないという事だった。

落ち着かせようと努力するナイアだが、恐怖に飲まれる者には一切意味がなかった。

そこへシルフィとラウがルウとメイを連れてナイアとアルマのところにやってきた。

「これからどうします？」

「とりあえずレーデンへ皆さんをお連れしようかと思っています」

「そうなんだ・・・そういえばアルマさん・・・ルークの家を見て見ます？一応村はずれだったので無事だと思うんですが」

「見ても大丈夫なのか？」

「ルークは家に居ることなんて滅多にありません」

「では行くか」

「な、何をするつもりなんですかつ！？」

行こうとする五人をナイアが止める

「姫には言っていないでしたな」

そしてアルマはこれまでの経緯をナイアに話した。

「言っておきますがこれは我等六人のみしか知っていません・・・内密にしてください」

「そうですね・・・私も彼についてはいろいろと知りたいことがありましたので」

こうして六人はルークの家へ向かった。

ルークの家の中は埃っぽく掃除なんて全くされていないようだった。「では手分けしてルークに関するものを探そう」

ルークの家は二階建てだったので一階をアルマ、ラウ、ルウの男三人が二階をシルフィ、ナイア、メイの女三人が探すことになった。

男三人組は現在台所を搜索中だった、台所には蜘蛛の巣のかかった食器が置いてあり人が住んでいるとは思えなかった。

「ホントに此处でルークが生活してたのか？」

「話によると二年前におじいさんが死んだらしいからそれから使われていないんじゃないかな？」

「とにかく今は手を動かせ」

そして三人は搜索を続けた。

そのころ女三人組は寢室を調べていた、寢室だけは時々使われているのか底まで汚くはなかった。

シルフィはそこで一枚の基本魔法の投影呪文を永久化させてある紙を見つけた、随分古いものらしくボロボロで色褪せていたがそこには幼いルークと思われる少年とルークと手を繋ぐ銀色の髪と金色の瞳を持った少女がいた。

だがそのルークの瞳は翠ではなく黒だった、だがその黒は幼い純粹さで輝いていた。

シルフィはその紙をばれない様に懐へしまった。

何やってんだろ・・・あたし・・・。

と毒づいていた。

その時一階で驚きの声があがった。

三人は急いで下に下りると台所の床に隠し通路のような階段が下へ続いていた。

「凄いつ!!こんな仕掛けよく解ったわね」

シルフィは驚嘆するとルウが苦笑気味に答えた。

「いやぁ・・・床が腐ってて抜けただけで・・・」

しばらく啞然としていた女三人だったが

「と、とりあえず下へ行きましょう」

とナイアが言ったので六人は下に向かって行った。

六人は少し広めの石造りの部屋に着いた、部屋はアルマの炎により明かりがともされてその姿が暗闇よりあらわになっていった。

床に書かれた魔方陣、本棚に所狭しと置かれた分厚い本、そして魔方陣の中央に置かれた漆黒の鎧とその首にかけられたブラックダイヤモンドと呼ばれる黒い結晶のついた逆十字のネックレス

「何なんだこの部屋は」

ラウが思わず声を出して聞いてしまう

その時アルマが逆十字のネックレスを見て何かを思い出した。

「ま、まさか・・・だがそんなはずは・・・いやしかしこれなら辻褄が合う・・・確かあの時の少女の名前も・・・」

「どうかしたの？」

ナイアの問いにアルマが初めての表情を見せた。

「なん、でもないで・・・す」

途切れ途切れに言った言葉でますます怪しいといった目で見るナイア

「知っているなら教えなさい・・・これは姫としての命令です」

「くっ!!・・・ですが姫様・・・」

「早く言いなさいっ!!」

いつものナイアではなく姫としてのナイアがそこには在りアルマの口調も丁寧なものになった。

「わかりました・・・姫は三つの瞳という伝承を知っていますか？」

「それは、小さい頃に書庫で見つけて読んだ事があります・・・確か何百年も前に存在した絶大な力を秘めた三つの瞳についてのことで・・・。」

「そうです・・・では何故その伝承について聞いたのか・・・三つの瞳の一つに闇の瞳と呼ばれるものがあるのは知っていますね？実は昔あったことがあるんですよ・・・その闇の瞳を持つ少年に・・・姫はこの地に昔あった国を知っていますか？」

「知らない・・・。」

「そうですね・・・これはレーデンがまだ戦闘国家などと呼ばれてない頃の話です・・・この地には悠久都市『ハーゼンデル』と呼ばれる都市が存在していました。今の今まで忘れていましたがハーゼンデルの城に私も招かれたことがあったのです。そこで二人の子供に会いました・・・一人は漆黒の瞳をした少年名前はティ阿斯・・・チエスの好きな少年でハーゼンデルにいたときは良く相手をさせられました。そしてもう一人リーンというその国の姫たる少女でした。その時の我等の国宰相は傲慢な者で皇帝が病で床についておられる時にハーゼンデルに攻め込みました。当時ハーゼンデルは怪しげな研究をしているということもあり宣戦布告の理由には事欠きませんでした。そして宣戦布告から三日後・・・ハーゼンデルは何の抵抗も見せずに降伏しました。そしてハーゼンデルのリーンという姫以外の全ての国のものは殺されました。」

「し、しかしそのような虐殺があったならば私の耳にも届いているはず・・・。」

「宰相が全てをもみ消したんですよ・・・そのために全てのハーゼンデルの民まで殺して、」

「酷い・・・でもそれとさっきの話の闇の瞳とこの部屋との関係はいつたい・・・。」

「その時のハーゼンデルの紋章はそのネックレスと同じ逆十字だったんです、さっきも言いましたがティ阿斯という少年の瞳の色は伝承にある闇の瞳の色の漆黒、そしてルークの家の隠し部屋にある

逆十字のネックレス、そしてルークの名前」

「名前？」

「チェスのルークとはキャスリングと呼ばれる特殊な動きを使うことが出来ます。キャスリングとは王<sup>キング</sup>を守るような形で使うことがあります。彼にとって自分への皮肉なのでしょうね・・・王を守ることが出来なかった自分への戒めの為の名前のような感じがしますから・・・チェス好きの彼が考えそうなことです」

「でもまだ無理矢理ではないでしょうか？」

その時シルフィが下を向いたまま一枚の紙を差し出した。

「ごめんなさい・・・多分これが決定的になると思う・・・。」

「これは・・・私が知っている頃の二人だ・・・何故こんなものを」

「寝室で見つけて・・・。」

「そうか・・・だがこれでハッキリした、闇の魔法使いの正体はルークだ」

それを聞いた瞬間ナイアの目から涙が一粒流れた

「残念ですが感傷に浸っている暇はありません姫様・・・もし本当にルークが闇の魔法使いならレーデンを狙うことは間違いありません」

「そうですね・・・事態を急いで收拾しなければいけませんね」

「とりあえず此处を出しましょう・・・。」

家の外に出るとルークが帰ってきているのか見えた。

「今が聞くチャンスかもね・・・。」

そして六人はルークを囲むように立った。

「な、なんだ皆・・・目が怖いぜ・・・。」

少し引き気味にルークが呟いた

「ルークに聞きたいことがあるんだが」

アルマがそう言うと即答するかのように



「聞きたいこと？学校のことはノーコメントだから」

「違う・・・ティマス・・・まだ白を切るつもりか」

ティマスという名を聞いた瞬間ルークの顔色が変わった。

「な、何言ってるんだ・・・ティマスって誰だよ？」

「ルークか・・・チエス好きなお前らしいって言えばお前らしいのかもな」

「チエスなんか嫌いだ」

「その名前に縛られている限り前には進めないぞティマス」

そして先ほどの紙を見せ付けた、だがその瞬間ルークの目が黒くなり、回りを殺気が埋め尽くし始めた。

「何を言われてもいいが人の心の奥底に入ろうとするとはよほどその命要らない物と見えるな・・・お前らなど此处で殺してやってもいいのだぞ」

いつものルークからは考えられないほど冷酷な言葉が六人に突き刺さる。

そして一瞬の後殺気が消えて

「だからこれ以上深入りしないでくれよな・・・友達失いたくないからさ」

そう言つてルークは部屋の中に入ろうとした、その時家を中心に魔方阵が展開される。

「なっ！？これは・・・巻き込んだか」

と唇を噛むルーク

空がゆがみ始めて空間にぽっかりと穴が空く・・・そしてそこから五人の漆黒の黒衣を着た者が現れる。

最後に紅い鎧に身を包んだ騎士が一人現れ口を開く

「さあ・・・狩りの時間だ」

## 第七幕

六人はバラバラに散開しルークはその場から真っ直ぐに紅い鎧の騎士の下へ走っていった。

漆黒の黒衣を着た者はアルマに襲い掛かった。

「我を狙うとは・・・愚か者どもがつ!!」

アルマの怒号と共に火炎の渦が黒衣を焦がすが全く動じた様子を見せずに突っ込んできた。

アルマは槍を手に持ち一人へ投擲した、標的となった者は紙一重で攻撃を避ける。

槍の切っ先が黒衣を裂きその者の顔が見えた、その顔は男の顔で生気の抜けたような青白い顔をしていて目の色は灰色だった。そして顔の見た男は低い声で詠唱を始めた。

「我に付き従いし影よ・・・我が命により此処に集い舞え」

詠唱が終わると男の影から一本の黒い針の影がアルマに伸びた。

「この技はあいつと同じ・・・さっきの詠唱は同じ物だったのか・・・」

・だが長かった分こちらの方が威力が高いはず・・・」

そして記憶を呼び返し影の壁を破れなかったことを思い出しとつさに身を引いて避けた、だが影の切っ先がアルマの方向へ伸び再度アルマを貫こうとした。

「氷よ刃となつて敵を切り裂けつ!!」

ラウの詠唱によって出来た氷の刃がアルマを襲っていた影の針を切り裂きアルマを助けた。

「アルマさん何してるんですかつ!! 傷が痛んで詠唱できないんですか?」

「いや・・・まさか影を破壊することが出来るとは・・・あいつだけが別格なのか?」

考えている間に先ほどの男が他の黒衣の者たちと合流し揃って詠唱し始めた。

「……影の底より生まれし死を司りし神である死神よ……我が前に立ちふさがりし愚かな者に等しく裁きを与えたまえ」「……すると一人一人の影から死神一体ずつが這い出てきた、現れた五体の死神は鎌を振り上げ二人に襲い掛かってきた。

その頃違う方向へ逃げた四人はルークの後を追ひ紅い騎士の所に來ていた。

「ほお……まさかとは思ったが彼の『魔王』がこのような辺境の地に住んでいたとはな……しかし魔王よ此処へ何のようだ？」

「その口ぶりだと俺目当てではなさそうだな……何が狙いだ？『炎帝』のスレイスよ」

「私のような弱い者の名前を覚えていただき光榮至極ですね……今回の目的はアルマの所持している火の神具の回収です。」

「組織の命令でも従わないぞ？」

「結構です、邪魔さえしていただかなければ」

そういつて不意にスレイスはルークの背後に手をかざす、

「邪魔者には退場して頂かないとね」

その言葉を発した瞬間暗闇に一筋の赤い光が突きに抜けると同時に横に何かが移動する。

「外しましたか」

そして暗闇からナイア、シルフィ、ルウ、メイが出てきた。

「先ほどの話が本当だとしたら……見過ごすわけには行きません」

「ルーク……貴方はいたい……。」

「僕の任務は彼等を無事にレーデンまで送り届けることだ、障害となるなら倒すよ」

「魔王とか炎帝とか良くわかんないけど、負けるわけにはいかないね」

やれやれと首を横に振るルーク

「分かったよ……降参だ降参」

「それは裏切りと見ていいのですか？」

「もしお前が彼等を攻撃するというなら……敵になるかもしれないな

いな」

「面白いつ!!」

一瞬にしてスレイスはルークの眼前に現れ腹を蹴り上げる、しかしその蹴りはただの蹴りではなく炎を纏った鋼鉄の脚甲のはかれた足の蹴りだった。

ルークは一度目を瞑り・・・刹那で目を開けた、その瞳は黒ではなくより深みのある漆黒と変わっていた。そして滑る様にして影の中に落ちた。

「避けられましたか・・・影という亜空間に逃げ込むなんて・・・本当に闇系統の魔法使いは厄介ですね」

「影よ舞え」

早口で唱えるとスレイスを囲むように影の針が現れる。

「炎よ壁となれ」

スレイスは影の針が襲い掛かってくるのと同時に炎の壁を作り出した。

影の針が燃え尽きながらも炎の壁を削っていく

「くっ!!これが魔王の力ですか・・・こんなに早く壁が壊されるとは・・・」

そしてついに炎の壁を突き破りスレイスを影の針が襲った。

「甘いですね・・・神具には劣りますが私も武器ぐらい持っているんですよ」

そういうと片手に魔力を集め出した

「業火よその姿を剣となせ」

詠唱が終わったその手には紅く輝く刀身を持った炎の剣が掴まれていた。

スレイスは炎の剣を一閃し影の針を振り払う、次々と襲い掛かってくる針たちを物ともせずには焼き払っている姿をニア達は見ていた。

「入る隙がない・・・化け物かよあいつ等」

「そんなことを言ったらルークに悪いよ・・・私たちのために戦ってくれてるんだから」

そう話している間にスレイスが全ての影の針を焼き払い終わった、  
がその顔は空を見つめていた。

「断罪の鎌」

不意にいつの間にか空に現れたルークが詠唱すると手に禍々しいほど巨大で黒光りする鎌が現れた。

ルークはその鎌を振り下ろすスレイスも抵抗をしようとしたが圧倒的な力の前では役に立たず炎の剣が粉々になった。そして鎌の刃はスレイスの体を襲った、あまりの勢いにスレイスは吹き飛んだが真つ二つにはなっていないかった。だがスレイスの鎧には痛々しい傷跡が残されていた。

「意外に固かったなその鎧」

と言いながらルークはスレイスに近寄っていく、スレイスは無理に体を起こし立つがにげようとしな

「逃げないのか？」

「逃げるのは騎士の恥でね」

「そうか・・・恥じか・・・面白い、では殺さんその恥じを背負って生きていくがいい」

そういうとルークは何もしないで身を翻し自分の家の方向へ行つた。

「ふっふっふ・・・この借りはいつか返すぞ」

そしてスレイスは氣を失った。

それを見ていた四人は・・・ルークに話し掛ける言葉を思いつかず呆然と見送っていた。

死神たちの動きが止まる・・・そして黒衣の者たちも糸の切れた操り人形のようにその場に倒れた。

「どうなっただ？」

「知らないが・・・どうやら親玉が倒されたようだな」

「じゃあどうします？」

「こいつらを拘束してから皆と合流をしよう」

「拘束って魔法使いにしても意味がないはずじゃ・・・。」

「意味はないと思うが・・・安心は出来る」

そしてテキパキと五人の黒衣の者達を拘束し二人はスレイスのいた方向へ向かっていった。

## 第八幕

古ぼけた小屋の一室のベットの上でスレイスは目を覚ました、ここは何処だろう？と思つて動こうとすると体が動かない・・・無理に動こうとすると先ほどの戦いで受けた傷が悪化してしまいそうになる。ふとスレイスは自分の体を見渡してみた、体にはいかにも頑丈そうな拘束具が何個も着けられていた。

「どうやら・・・捕まつたみたいですね」

何か使える者はないかと回りを見渡していると部屋の扉が開いた。

「目を覚ましたみたいですね」

そこには先ほど自分が殺そうとしていた女がいた。

「貴方にはいろいろと聞きたい事があるのですが・・・とりあえず包帯を変えましょう」

そう言つて女はスレイスの傷を丁寧に消毒し包帯を巻き始めた。

「貴女の名前は？」

「私ですか？・・・ナイアって言います」

スレイスは少し驚いた顔を見せた

「ナイア！？ということはレーデンの姫だったのですか？」

「形式上ではそうなっていますね・・・ですが殆ど親から見離されたようなものですが」

「見離された？」

「私は第二王女なのですが・・・非公式ですが私の一つ下に弟がいるのです。父上は王位を弟に継がせる気の様で・・・弟は文武に優れていまして魔法にも長けているのです」

「初耳です」

「ですから非公式なんですよ」

とナイアは少し笑つてみせる、スレイスはその顔に少しドキツとした。

「何だか長話になつてしまいましたね、退屈させてすみませんね」

「いや、面白い話でした・・・お礼に一つだけいい事を教えてあげましょう、魔王には・・・あなた方がルークと呼んでいる青年にはあまり関わらない方が良いでしょう？」

「それは忠告ですか？」

「いえ、ただの怪我人の戯言です・・・さてと、私はこれからどうなるんです？」

「傷が回復して魔法が使えるようになる前にレーデンに連れて行かれると思います」

「そこで・・・尋問というわけですか」

「すみません」

「何謝っているんです？もともと私は貴女を殺そうとしたんですよ？」

「それでも・・・すみません」

「フツフツ、貴女は本当に面白い、私の部下がこの村を襲った時とは全く違いますね」

「どういうことですか？」

「焰と言う火の魔法使いと戦ったでしょう？彼は組織の命令を無視してこの村を襲ったのです」

「・・・その時の貴女は問答無用で彼に魔法をぶつけたじゃないですか？」

「焰は罪のない人々を殺しすぎていました・・・ただの殺人者にかける情けはありません」

「言っておきますが、私は彼の三倍は人やモンスターを殺していますよ？」

「しかし焰の目はただの快楽殺人者の目でああなたの目は確かな意思を持った者の目です」

「流石は姫・・・人を見る目は確かですね」

「誉めても開放はさせてあげられませんからね」  
とナイアは意地悪そうな笑みを見せていった

「素直に誉めているんですよ・・・しかし本当に悲しいことですね」



「何がですか？」

「貴女の祖国が三日後に私の組織の大部隊に攻められるということ  
がです」

その言葉にナイアは啞然とした。

「そ、それは本当のことですか!？」

「本当のことですよ・・・ですがここからレーデンまではどう頑張  
っても五日はかかる道のりですからね」

「そんな・・・父上・・・。」

ナイアはその場に泣き出してしまった。

「泣かないでください・・・女性に泣かれるのは初めてなんです・  
・対応に困るじゃないですか」

それでもナイアは泣き続けた。その様子にスレイスは溜息をついた。  
「方法がないこともないんですよ？」

その言葉にナイアは泣き止んだ。

「本当に素直な方ですね」  
とスレイスは苦笑した。

「あの・・・その方法っていったい・・・。」

「魔王の影を使うんです・・・魔王の影は一種の異世界のようなも  
のになっていてこの世界の何処へでも出口を作ることが出来るので  
す・・・ですがそれでも時間は遠ければ遠いほど繋げるのに掛かり  
ます。しかも作っている間は魔王は自らの魔力を放出し続けられ  
ばなりませんから・・・耐えがたい苦痛に違いありません。」

「そんなこと頼めません・・・。」

「あなたがどう思おうと勝手ですが・・・そのために犠牲が出るこ  
とも考えておいてください」

「でもどうしてこんなことを教えてくれたんです？」

「怪我人の単なる気まぐれですよ」

そしてナイアは「ありがとう」と言い残して部屋から出て行った。  
「ありがとう・・・ですか」

スレイスはそう呟いてまた眠った。

ナイアはスレイスから聞いたことを皆に話し探すのを手伝って貰っていた。

シルフィとラウは生き残った生徒にルークがナイアの大事な物を持って何処かへ行ってしまったと嘘の情報を流し探すように促した。だが一時間経つてもルークの居場所は見つからなかった。シルフィの風の索敵範囲は半径三キロほどだった。それは村をすっぽり軽く覆えるような大きさだったが見つけることが出来なかった。

だがルークが誰にも何も言わずに村を出ることは考えられず途方にくれていた。

そして一度六人は集まった。

「風の索敵に引つ掛からない・・・でも町の外に行つたことは考えられにくいから・・・多分風が無い所にいると思う」

「風が無い所なんてあるか？」

「それもそうだよな・・・風が無いって事は空氣が無いって事だし・・・人が生きていけるわけ無いしな」

「もしかして結界魔法でも張っているのではないですか？」

「それはないと思います姫・・・見たところによると闇の魔法は攻撃に特化しているようですし」

「でも未知なる魔法ですしあるかもしれません」

六人が議論を続けていると

「闇の魔法に結界魔法はあるみたいですがその手の結界魔法ではないですよ？」

と背後から声がしたので振り返った、そこにはスレイスの姿があった。

「お前・・・どうやって拘束具を・・・」

「私には一つだけ自慢できることがありますね・・・傷の直りが常人よりも格段に早いんですよ」

「何のつもりでここに来た・・・。」

「困っているようなので助言をと思ひましてね」とナイアにスレイスはウインクする。

「風の索敵は本当に素晴らしい能力ですが欠点があります。一つ目は風の無いところは索敵できない、二つ目は一度に風の集めてきた情報を処理できない、三つ目は膨大な魔力を有する者がいる場合魔力によって索敵にモヤがかかり正確に索敵が行えない・・・ようするに魔王の魔力が凄すぎて見つけれないというわけです」

「そんなこと今まで一度も・・・。」

「それは魔王が魔力の源の目を封じていたからでしょう」

「それじゃあもう私じゃルークを探せないの？」

「そんなことありませんよ・・・きつと今貴女がしている索敵は魔王という人物を指定した索敵ですね？では今度は魔力の発生地点を指定して調べてみればいいのです・・・私とそこにいる朱雀以外の場所で魔力が多く発生している場所が魔王のいる場所です」

「何でこんなことを教えてくれるのですか？」

「怪我人の・・・いえもう怪我人ではありませんね、暇人の戯言です・・・そういえば私もレーデンに用があるので連れて行ってください」

連れて行けるかっ！！とアルマが反論しようとした時にナイアがそれを静止した。

「分かりました・・・その代わり手伝ってくださいね」

そしてシルフィの風の索敵が終了すると

「本当だ・・・ここ以外に一箇所だけ魔力の凄いところがある・・・。」

「何処だそこ？」

「ここから少し遠いところ・・・ルークがこんなところに行っているなんて初めて・・・。」

「ではとりあえず行ってみましょう」

そしてスレイスを含めた七人はルークの下に向かって行った。



## 第九幕

村の端にある青々と生い茂った森のほぼ中心部分存在する泉の前にルークは座っていた。

手に持つ草がルークに吹かれることによって独特のハーモニーを森に響かせている、その音色に同調するように泉は波紋を作り出し、波紋は重なり合って泉の表面を走り回る。

不意にルークの演奏が止まる

「炎帝か・・・厄介事は嫌いなんだがな・・・。」

まあ、わざわざ厄介ごとに巻き込まれるように助けてしまった俺は馬鹿なんだろうがな

そんなことを思っているとルークの目の色が変わった。

「出て来い・・・何のつもりだヘル」

誰もいない森、だがそこから女の笑い声が聞こえる。

「フフフ・・・流石ねルーク、いえ魔王って呼んだ方がいいかしら？」

声と共に現れたのはルークより少し年上の二十代位の女だった。

「どちらでもいい、だが俺に会いに来るなんてどういっつもりだ？」

「簡単に言つと・・・組織からあなたの抹殺指令が出てるわけで」

「原因は？」

「ブルードラゴンの奇襲作戦を妨害したことで炎帝の作戦を妨害したからだって」

「ほお」と言うことは、お前は俺を殺しに来たのか？」

ルークは殺気をヘルに向けて発した。

「ちょ、ちよつと早まらないでよ・・・。分かってるでしょ？私があんたに勝てないことも、私があんたの味方ってことも」

「まあな・・・で組織の内部情報を集めてきてくれたんだろうな？」

「あつ！！そうだ、朗報だよ！！お姫様の幽閉されている場所が分かったよ」

「本当かつ！！何処だっ！！何処にいるんだっ！！」

今までとうって変わりルークは目を輝かせた。

「東の『ゲートル』っていう、組織が抑えてる国があるんだけど・  
・その要塞」

「ふっふっふ・・まさか組織がリーンを捕縛してたとはな・・  
聞いた話だとレーデンが捕まえていたと思ったんだがな」

「私も驚いたよっ！！今までずっとレーデンの内部ばっか調べてた  
からね」

「つまり俺は組織に利用されてたって訳だ」

「そういうことになるんだろうね」

「ツケは倍にして返してやるぜ」

「その意気だよ」

「ありがとな」

いきなりそっけなく礼を言うルークにヘルは目を丸くする・・・そ  
してルークは何処かへ行こうとする。

「まさかとは思うけど・・あんだ単身でゲートルに乗り込むつも  
り？」

「そのつもりだけど」

「あんたは馬鹿かつ！！ゲートルにはあんたや私と同じ闇系統の魔  
法使いが五人も配備されていて、その他にも組織の魔法使いがわん  
さかいるんだよ」

「だからどうした？」

「どうしたって・・どう考えてもあんた一人じゃ勝てないでしょ  
ルークは少し考え心底不思議そうに」

「なんで？」

と答えた

「なんでってあんた・・もういい・・でも一応私もあんたと同  
じ姫様を守る三人の騎士の一人だから私も手伝わせてもらうよ」  
ルークは少し嫌そうな顔をしながら了承した。

「じゃあ行くか・・・。」

「待つて・・・あんたつてホントに馬鹿だね、連中に何の挨拶もなしにいなくなっちまうのかい？」

「悪いのか？」

「悪いねっ！！急に消えちまったら誰だつて心配するもんさ」

「そういうもんなのかなあ」

「いつものあんたなら分かつてるはずだよ？」

ルークは小さく「分かった」と言い影に消えていった。

「あの子も一途だねえ・・・まあしょうがない事なんだろうけどね」  
そう言つてヘルもぼんやりと薄くなつていき消えた。

ルークが森から外に向かつて歩いて行くとナイア達が正面から歩いてきた。

「あっ！！」

ナイアはまるで宝物でも見つけたかのように目を輝かせた。

一方ルークは漆黒に染まつた瞳をあまり見せたくは無いらしく目を合わせようとしなかった。

「で・・・こんなところまで何のようだ？」

そつばを向いたまま話し掛けるルークにシルフィが一瞬怪訝な顔を見せたがナイアがそれを抑える。

「折り入つて頼みたいことがあります」

「頼みたいこと？」

ルークは焦る心を抑えつつ最後まで話を聞くことにした。

説明が終わりルークは少し呆然とする。

何故なら自分が恐ろしい殺人者だというのに気にした様子も見せず  
に喋りかけてきたからだ、しかもその力を借りたいとまで言っている。

ルークは少し考え「分かった」と小さいが確かに返事をした。

その後ルークは他の生徒達も面倒だから一緒に送ると言い村の中央

に集めた。

何の説明もされずに集められた生徒達はそれぞれが希望や不安を兼ね揃えた顔をしていた。

もはや代表のようになつた六人はスレイスを無駄と知っていながら縄で縛り糸の切れた人形のような漆黒の黒衣の者たちを同じように縄で縛つてルークの前に立っていた。

「準備は良いみたいだな・・・こちらの呪文の準備も出来ている・・・いつでも送れるぞ」

「ではすぐに送つて頂いて良いですか？」

「分かつた・・・はあっ!!」

次の瞬間そこにいるルークを除いた全ての者が暗転した影の空間の中にいた。

そしてシルフィとナイアとラウとルウとメイの頭の中にルークの声が響く。

「お前達の信じた道を進んでくれ・・・俺も俺の信じた道を進む」  
気付いた時には緑色の草の上に他の生徒達と同じように横になっていた。

「ここは・・・城の中庭!？」

ナイアは気付くなり驚くように立った。

騒ぎを聞きつけたのか兵士達が周りを囲む

「賊がっ!! 何処から入った!?!?・・・その顔・・・もしか様とアルマ様!？」

兵士達は二人に気付くと音よりも速く謝罪を述べた、そして一人の兵士が皇帝へ報告に行った。

数分も経たないうちに皇帝でナイアの父親でもあるゼルフアーがやってきた。

「おおナイア・・・無事で何よりだ、それよりもどうやってここに入った？」

「そんなことよりも父上申し上げたいことがございます!..!」

「何だそんなに改まつて？」



「この国に三日後敵が攻めてきます」

「敵？敵とはどのようなものだ？」

「かなりの戦闘力を秘めた正体不明の組織の魔法使い達です」

「その情報は確かなのか？」

「信用できる情報です」

ゼルファアは少し考え一人の兵士に告げた。

「緊急の会議を収集する、至急散らばらせてある四大將軍達に連絡を取り城へ戻るように連絡をしろ」

兵士は一目散に外へ駆けて行った。

「忙しくなりそうだな」

とゼルファアは小さく呟いた

## 第十幕

「済んだのかい？」

ルークの背後から突如ヘルは出現し声をかける

「たった今済んだところだ・・・お前が言ったとおり別れの挨拶もちゃんとした」

少し悲しそうに先ほどまで皆がいたところを見る。

「後悔してないのかい？」

「後悔・・・か、無いと言えば嘘になるな、だけど俺にはどんな犠牲を払ってもやらないといけないことがあるからさ」

そして空に向かって願いを込める。

皆・・・死ぬんじゃないぜ

その時ポツンと地面に水滴が垂れる、ヘルがその様子を見て驚く

「ルーク・・・あんた泣いてるじゃないかっ!？」

「泣いてる?・・・そうか・・・いつの間にか護りたい者が増えてたんだな・・・俺」

ルークは少し懐かしそうに村を見て、涙を一瞬にして拭い険しい眼光になる。

「ランスは何処にいる？」

「ランス?ゲートルの近くの森にあの後はずっと潜んでるって聞いたけど」

「そうか・・・居場所は分かるか？」

「そりや分かるけど」

「お前の得意技で移動させてくれ」

「はいはい・・・どうせ強制なんでしょ?それに味方はたくさんいるに越した事ないしね」

ヘルは手を地面に置いた。

「続け続け何処までもっ!!私の影よっ!!道となれっ!!」

唱え終わった瞬間ヘルの足元に穴が空く

「出来たよっ!!」

ルークは返事も無しにその穴に飛び込こんだ・

「なっ、礼ぐらい言いなさいよね・・・。」

文句を言いつつヘルもその穴の中に入る。

森の木の影から一人の青年が出てきた、

「ここがランスのいる森か」

あたりを見回すが誰の姿も見えない、その背後の影から続くように一人の女が出てきた。

「ルークっ!! 先に行くともう送ってやらないわよ!!」

ルークはヘルを一瞥すると森の奥へと足を踏み入れた。

森独特の落ち着かせる空気が程よく気持ち良く、ルークは少し寝たくなった・・・だがルークは欲求を我慢し先へ進んでいった。

森を歩くこと数分前方に人の気配がしたためルークとヘルは身構えた・・・だが歩いてきた人の輪郭が見え構えを解いた。

「デカイ魔力が現れたからもしやと思ってきてみれば・・・やっぱリティアスカ」

「その名前はリーンを助け出すまでは捨てた。」

「じゃあやっぱリルーク？」

「そうだ」

「でもまあ・・・何の因果か知らないが、俺たち三人の姫様の騎士が揃うなんて何事だ？」

「ランス・・・お前はヘルから何も聞いてないのか？」

そしてルークはヘルの方を見る、ヘルは目線をずらし合わせようとしない。

「で、何のようなんだ？」

「リーンの居場所がわかった」

ランスは絶叫しそうな勢いで狂喜した。

「本当かつ！！本当なのかつ！！でその場所はっ！！」

「この近くのゲートルだ」

その言葉にランスは言葉を失う。

「嘘だろ・・・こんな近くに・・・」

そしてランスは二人に背を向けて何処かへ走っていく。

「何処に行くんだ？」

声が聞こえたのかランスは振り返って大声で答えた。

「助けに行くに決まってるだろ！？」

二人は急いで後を追った。

ゲートルへと入るための門の数十メートル前に隠れるように三人は伏せていた。

「ゲートルか・・・結界が張ってあるが・・・入れそうか？」

ランスの問いにヘルは首を振った。

「私の能力の弱点は一度見たことある場所じゃないといけないって  
ことと影がある場所じゃないと駄目

ってことと外部から結界へ入れないことだから無理ね」

「ルークお前の影なら入れるんじゃないか？」

「無理すれば入れるかもしれないが・・・戦闘を考えるとやはり温  
存はしておきたい」

「そして俺は・・・短距離しか移動できないから無理と・・・じゃ  
あ作戦は一つだな」

ニヤリと笑うルークとランス

「私は戦闘は殆ど専門外なんだけどなあ・・・しかもあんた達が  
やろうとしている事を作戦とは呼ばないわ」

と頭を抱えるヘル

そして

「強行突破だ！！」

ランスが叫ぶとともに三人は門に走っていった。

門の前に立っている六人の兵士は自分達に向かって来る怪しい者たちを視界に捕らえた。急いで緊急の笛を鳴らそうとした一人の兵士を見てランスはニヤリと笑う。

「気付くのが遅すぎだ」

ランスが皮肉気に話すと同時にランスの影が地面から浮き六本に枝分かれし六人の兵士に伸びていく。

「あの世で後悔するんだな」

言葉が終わらないうちに六本の影の先が剣の形を成し六人の兵士の首を刎ねる。

「相変わらず凄いわね・・・無詠唱魔法なんて」

ヘルが感嘆するようにランスを見る。

「凄くねえよ・・・ヘルには長距離影移動っていう凄い技があるし・・・ティマス、いやルークなんて・・・規格外品だろ？」

「ルークは・・・そうね」

その時二人は会話に入ってこないルークが回りにいないことに気付く、そしてゲートル内で黒煙が上がりで危険を知らせるサイレンになる。

「ルークの奴・・・派手にやってやがるな」

「私たちも行きましょう」

そしてヘルとランスは中に入ってしまった。

十数人もの兵士達がルークを囲んでいた。だがその囲んでいる兵士達の目には逃げたいと言う言葉が語られていた。

「ま、魔王・・・」

一人の兵士がその名を口にとすると兵士達は一步引いた。

「組織の幹部様が何故こんなことを・・・」

一人の兵士が呟くように言った。

「だ、だがいくらあんたとはいえこのゲートルの守護隊長の方には勝てないだろ？」

恐怖を噛み殺し笑顔を作る兵士

「そうだったな・・・人魔六神じんまろくしんの六之神ろくのかみが居るんだったな・・・忘れてたぜ。」

ルークは渋い顔になり舌打ちをする。

「じゃああいつが出てくる前に仕事を済ましちまうかつー!!」

そして詠唱を始めるルーク、その詠唱を止めさせようと兵士達が一気に駆け寄る、だがルークの詠唱は早かった。

「断罪の鎌」

そして取り出した鎌を無造作に振るう。すると回りにいたはずの兵士達の上半身が消える、数秒の後空から赤い液体とともに上半身が落ちてくる。それら全て今まさに襲いかかるうとするような目を見開いた状態だった。

「俺の道はいつも血だらけなんだな・・・。」

そう呟くとルークは先を急いだ。

走っているとヘルとランスに会い合流をした。三人は街を抜けると少し開けた場所に出た。

「あはは・・・こういう場所ってよく敵が罫仕掛けてて囲まれるんだよな・・・。」

ランスが頭を掻きながら言うところルークとヘルは苦笑する。

走り出そうとした時三人が同時にその場から飛び退く、次の瞬間先ほどまで居た場所に炎弾や氷弾などが降り注いだ。すかさず持っていた鎌をルークは回転させながら投げつけた。すると何も見えなかった場所から十六人の魔法使いが現れ鎌を避けた。

「ヤバイな・・・こいつら俺らと同じ近接戦闘も出来る組織の魔法使いだ」

素早い動きを見て三人は頭を抱える。

「おいルーク・・・こいつらは俺とヘルに任せて、姫様の元に行け」  
ランスが突然そんなことを言ったのでルークは啞然とする、がすぐ

に我に返り少し考えて短く言葉を紡ぐ。

「頼む」

そのままルークは魔法使い達の脇を抜けようとする、だが相手も黙ってみているはずがなくルークに攻撃をしようと詠唱を始めようとする。ところがランスの足元から伸びた影が魔法使い達を襲い魔法使い達は詠唱を中断し避ける。

「姫様とティアスの時を隔てた再開を邪魔する奴は・・・死んでも文句は言えないぜっ!!!」

ランスの気迫が勢いを増すとともにランスの影が回りの影を吸収し大きくなり始める。

「見せてやるぜ・・・本当の影の恐ろしさって奴をな」

不適に笑みを浮かべてその場に立つ姿はまるで勝利を確信しているようだった。

「あらら、それ使うんじゃ私は必要ないわね？」

ヘルはそう言うと言の影の中に入って消えてしまった。

ランスの影は自分と同じぐらいだった影が五十倍ほどになっていた。「行けっ!!!」

ランスの掛け声とともに影から五十体の人型の物体が現れた、その手の部分には黒い剣が持たされていた。影によって出来た五十体の人型は生まれるとともに十六人の魔法使い達に突撃して行った。

魔法使い達は慌てた素振りを見せず詠唱をし魔法を放った。炎弾、氷弾、鎌風、雷撃が続けざまに放たれ轟音が轟いた。砂煙が巻き起こり何も見えなくなつた。この隙に攻撃を仕掛けようとし砂煙に五人ほど突っ込んだ。その瞬間ランスの声が当たりに響く。

「勘違いしてないか？こいつらは人じゃない・・・影だぞ？」

同時に砂煙の中で何かが動き鮮やかな血飛沫が辺りに舞う。

砂煙が晴れると首がなくなつたり腕が半分ちぎれたり胸の辺りに大穴が開いている影の人型が動き回っておりそのボロボロになった黒い剣で五人の魔法使いを解体していた。

「さてと・・・後十一人、次に死ぬのは誰だろうな？」

そして影の人型はまた走り出す。



## 第十一幕

街の中心にある要塞にルークは着いていた、途中に予想していた妨害がなかったため少し拍子抜けしていた。

「何はともあれ・・・行くか」

そしてルークは要塞の中へ入っていった。

要塞の中は全くの無人で無用心だとも思ったが同時に罠があるかもしれないという不安が現れてきた。

要塞は色々な隔壁が緊急時の為下りており下手に暴れるよりかはこのまま進もうとほぼ一直線に進んでいった。

進んでいくと少し大きめの部屋に着いた、それはまるで闘技場と呼ばれるような円形の部屋だった。その部屋の真ん中に一人の男が立っていた。男を見たルークは全身が強張り緊張した様子でごく自然に呟いた。

「六之神・・・『暴君』 グラウス・・・」

次の瞬間グラウスとルークが同時に詠唱をする。

「影よ、舞え！！」

「<sup>ゴレム</sup>土人形の豪腕」

ルークの足元から数本の影の針がグラウスを襲おうとしたが突如床から出てきた巨大な土の腕に握りつぶされてしまった。

「まだだ・・・まだこんなものでは足りないぞ魔王っ！！もつと闘争を殺意を本能を俺に感じさせてみるっ！！」

いきなり叫んだグラウスに啞然としたルークだったがグラウスの二つ名の理由を思い出したので思わず頭が痛くなった。

「そんなに戦いが好きならお仲間とやってろ・・・俺は忙しいんだっ！！」

ルークの声に答えるように握りつぶされた影が脈打ち土の腕を壊し一つに交わり螺旋状の針へと変わる。針は高速回転をしながらグラウスを襲った。

「土より石を石より岩を岩より山をつー！」

次の瞬間部屋全体が揺れ、部屋中にひびが入り要塞が崩れた。凄まじい轟音とともに先ほどまで要塞があつた所に小さい山が出来ていた。

「もう終わりか？魔王よ・・・しかし要塞に兵士がいないことを不思議に思わないとは愚か者だな」

出来上がった山の頂上に笑みを浮かべたグラウスが立っていた。

その時瓦礫の一つが動いた、と同時に濃厚な殺氣と呟くような声が聞こえる。

そして現れたのは黒い球体外壁が剥がれる様に落ち、その中には小さい声で呟くルークがいた。

「貴様に一つ聞く・・・リーンと言う女の子はしっかり非難させたんだろうな？」

願うような声でルークはグラウスに聞いた。するとグラウスは笑みを浮かべながら答えた。

「兵士以外はここで全員殺す計画だ。」

その言葉を聞いた瞬間先ほどまで漂っていた殺氣が消えた。そしてルークにも変化が現れた。

涙を流しながら狂うように笑っている、その光景は万人が狂人と呼ぶような光景だった。

「あはっ、あははははっ！！」

天を仰ぐように空を見上げルークの動きは止まった。

「あまりの衝撃に狂ったか・・・まあいい、狂った者など興味はない・・・ここで死ね」

冷淡な言葉とともに山が先ほどの巨大な腕のような形に変わっていき、そして拳を固めて巨大な岩の拳がルークを襲った。

「死神は歓喜し神々は逃げまとう、来い呪われし剣」

その詠唱は岩の拳が襲うまでのたった一瞬という速い詠唱だったが、グラウスにはその一言一言が鮮明に聞こえた。

そして岩の拳に黒い閃光が貫通しバラバラに崩れ落ちた。グラウス

はその光景を驚きの表情で見つめた。

「何年ぶりだろうな、魔剣を使うのは・・・リーンが使うなっていた時以来使ってなかったからな・・・でももう使っても良いよなリーン」

ルークの姿は黒衣ではなくルークの家の地下にあった漆黒の鎧と逆十字のネックレスをかけた姿に変わっていた。そしてその手には黒い刀身の剣が握られていた、その黒い刀身には四つの紫の小さな玉がついていた。

「くつくつく・・・本当に面白いな・・・さあ心行くまでこの闘争を楽しもうぞっ!!」

そしてグラウスは詠唱を始める

「地底より出でよ!!大地の巨人よ!!」

そして大地に地割れが起き地底から岩の巨人が現れた。ルークは岩の巨人に向かって行き魔剣で貫こうとした、だが魔剣は固い岩の巨人に弾かれた。

「そんな剣など通用せぬわっ!!」

そう言い放ちながらグラウスは岩の巨人で攻撃を放った、その巨体に似合わない岩の巨人のタツクルのスピード、ルークは避けることが出来ずまともにタツクルをくらった。

軋む体中の骨の音が頭の中で反響し口からは危険な位の量の血が吐き出された、だがそれでも一命を取り留めていられたのは、漆黒の鎧のおかげのようだった。

ルークは魔剣を杖代わりにしながら立ち上がり、今まで片手で持っていた魔剣を両手で持った。魔剣自体両手剣らしく柄の部分が少し長めに出来ていた。

「見せてやるよ・・・魔剣こいつの能力を・・・」

ハッターだと思ったグラウスは岩の巨人に攻撃を命じこれで勝負が終わると思い背を向けた、この時のグラウスは気付かなかった。この慢心によって自分が負けることを・・・。

少し目を離れた事が戦場では致命的なミスになることをグラウスは脇腹に負った大きな傷を見ながら思い出していた。

正気を取り戻した今でも何が起きたのか分からなかった、分かることといえば巨大な何か岩の巨人を破砕し自分を掠めたことぐらいだった。

掠めただけで左の脇腹が抉られた・・・直撃をしたらと考え岩の巨人の状態を思い出し少し冷や汗が出した、そして自分にここまでの怪我を負わせた若い青年に賞賛の眼差しを送った。

ルークは無理に体を動かしたので息も絶え絶えだった、だがまだ決着は付いていなかった。体に無理矢理命令を下しグラウスに歩み寄る、ルークの心にあったのはリーンを殺したグラウスへの復讐心だけだった。

「なかなかやるな・・・魔王」

はつきりとした言葉でグラウスが喋ったのでルークは驚いた、ルークが傷つけた脇腹の傷はなくなっていた。

「馬鹿な・・・あの傷が回復したと!？」

目を疑い驚いたルークだったが同時に自分の最後の時が来たと思った、だが次にグラウスの口から出た言葉にルークは啞然とした。

「なかなか面白かったぞ魔王よ・・・俺をここまで楽しませた褒美だ取っておけ」

そしてグラウスが指を鳴らすと同時に壊れた要塞の瓦礫が左右に分かれて片付き階段が現れる。

「この階段の入り口には物理結界が張ってある、瓦礫ぐらいでは傷つかぬほどのな」

「それはどういう・・・」

ルークは、意味だと言葉を紡ぐはずが口がパクパクと魚のようになってしまった。

ルークの目線の先には、同い年位の女の子が立っていた。ルークの

目から涙が流れていた。そして涙を拭って少し涙に濡れた目を向けてこう言った。

「少し遅れたけど・・・迎えに来たよリーン」

そしてリーンと呼ばれた女の子も目を潤ませて答えた。

「信じてたよ・・・ティアス」

だがリーンの顔が少し険しくなる、リーンの視線を負ってみると自分の手の方向にいつている事に気付き慌てて魔剣を隠した。

「こ、これは・・・。」

「ティアス、約束を破ったのね」

リーンの気迫に後ずさりするルークだったがリーンの気迫が消えていくのに気付いた。

「こんなに怪我をして・・・死んじゃったら元も子もないじゃない・・・。」

「ごめん」

数十秒沈黙が続き、その沈黙をグラウスが破った。

「良い雰囲気で申し訳ないが俺はそろそろ帰らせてもらおう・・・魔王・・・今回は負けたが次はそうはいかぬからな」

そしてグラウスは端に除けた瓦礫で巨人を作り出しそれに乗って何処かに行った。

「そうだリーン、ヘルとランスも来てるんだっ！！二人の所へ・・・うぐっ」

うめくと同時にルークは倒れこみ魔剣と漆黒の鎧は消滅し服装は黒衣に戻った。

「だ、大丈夫なの!？」

「平気だよ・・・少し休めば元気になる」

そしてリーン支えられるように二人の下へ行くと何故かランス一人がそこに座っていた、回りには襲ってきた魔法使い達の死体があった。

「あれ、ランスお前一人か？」

「ヘルは戦闘が始まるなり何処かに行っちゃった・・・それより

も俺はお前を何て呼べば良い？ティアスか？ルークか？」

「ティアスに戻る・・・放浪人ルークとしての仕事は終わった。これからはリーンを護る騎士のティアスとして生きていく」

「分かった・・・よろしくなティアス」

「ああ、改めてよろしく」

「んで少し話は変わるけど・・・これからどうする？」

「組織に借りを返すしかないだろ？」

「そう言うと思ったぜ」

二人が笑いあつてると背後からヘルが現れた。

「おまたせえっ！お姫様無事でよかったです！！」

「ヘルお前今まで何やってたんだ？」

「良くぞ聞いてくれましたっ！！闇系統の魔法使いを片っ端から不意打ちで倒してたんだよ！！」

とランスの問いにヘルは胸を張って答えたが、三人の視線が痛かったのは言うまでもない。

「そ、それよりこれからどうするか相談してたけどレーデンに行かない？」

「馬鹿言っとなっ！！姫様や俺たちの国が奴等にどんな目に合わされたのか忘れたのか！！」

ランスの怒りにビックリしたヘルだったがティアスにあんたはそれで良いの？と目で訴えた。

「俺は・・・できる事なら行きたい」

「ティアスまで何言ってんだ！？」

「ランス・・・レーデンは組織に狙われてる・・・組織に狙われた国がどうなるのか組織に入らなかったお前でも知らないはずじゃないだろ？」

「狙われてるのか？」

「ああ・・・あそこには世話になった皆がいる・・・だから行かせて欲しい」

そしてティアスは頭を下げた

「ちょ、やめろって・・・分かったから」

「リーンも良いか？」

「ティアスの思いを止めることは私には出来ませんから」

とリーンは笑って答えた。

「決まりみたいね・・・じゃあ一気にレーデンまで飛ばすけど良い？」

三人は頷いて答えた。

「続け続け何処までもっ！！私の影よっ！！道となれっ！！」

そして四人は影に吸い込まれていった。

グラウスは瓦礫の巨人を止めていた、脇腹からは血が滲み出していた。  
「土で応急処置をしたのはいいが・・・やはり完全には止まらぬか」  
そして脇腹がボロボロと崩れ傷が露になる、先ほどまで脇腹の肉だったものは崩れると砂になった。

「ふう・・・他の奴等になんて言い訳をするか・・・。だがまさか世に存在する五つの神具以外にもあれほどの力を持った武器が存在するとは・・・魔剣と言っていたか？」

グラウスは重症にもかかわらず、珍しく考え事をしていた。  
そしてそのままグラウスは目を瞑り意識を手放した。

## 第十二幕

ナイアは城の中の自分の部屋で始まったであろう会議のことを考えていた。実は一行が着いてから二日という時間が経っており二日の間に解決した問題がいくつかあった。例えば魔法学校の生徒達の対応だ、魔法学校の生徒達はレーデンに着いたその日に一人一人に援助金が支給されることが決定し希望するものはレーデンの魔法学校への転入も手配するという処置がされた。

だがシルフィとラウは転入を拒みナイアの護衛をしたいと言い出していた。最初は断っていたナイアだったが熱心に頼みこむ二人に負けて護衛として雇うこととなった、この時アルマは何の異論も唱えず逆に二人を応援していたのはナイアには秘密である。

そして無事仕事を終えたルウとメイだったがレジスタンスの一員ということ隠したとアルマの取り計らいもあり少しの間レーデンに居る事となっていた。

そしてこの日事情を聞いた皇帝のゼルフアーに呼ばれたアルマを含めた四大將軍の『青龍』ハザン『白虎』ザツクル『玄武』ドウガスが一つの部屋に集まっていた。

四人が席に着いたことを確認しゼルフアーが口を開いた。

「さて、皆揃ったようなのでそろそろ話し合いを始めたいと思うが・・・大まかなことは伝えた通りだ」「言いづらいことなんだが・・・その幹部を倒したのはハーゼンデルの生き残りだ」

四人が「馬鹿なっ!？」という顔でアルマを見るがアルマは顔色を変えない。

「その様子だと本当なのだな、しかしハーゼンデルか・・・あの国にはすまないことをした」

「皇帝の責任ではありません・・・全てはあの宰相が起こしたことですから」

と頭を抱えるゼルフアーをハザンがフォローする。



「・・・敵の正体なんて明日になったら分かるんだろ？ だったら今は正体なんかじゃなく作戦を練ろうぜ」

ザックルの言葉にハーゼンデルの問題は一時置いておくこととなった。

「さて作戦を立てたいと思うが・・・言いたいことはないか？」

そしてアルマが静かに立ち上がった。

「一つ言っておきたいことがある、敵の出現方法についてだが・・・奴等は影を使つて現れると思われる」

「影だと？」

「ああ影だ・・・報告書にもあつたとおり、奴等は闇系統を魔法を使うことのできる、闇の魔法使いがいる。その闇の魔法使いの技の中に影を使つた移動があるのだが・・・これを捉える事はハッキリ言つて不可能だ。」

「不可能だと？ それでは敵の現れる場所が分からないと？」

「そうとも言えない・・・どうやら影の移動法は影を繋げることによって出現する、そしてレーデン周辺で影が多くできるところといえは一つしかない」

「忘却の森だな？」

ゼルフアーの言葉にアルマは頷いた。

「ですからこれから私は忘却の森へ兵を率いて行つて来たいと思います」

「分かった・・・一応ドウガスは城に残つてもらうとしてハザン、ザックル、お前達はどうする？」

二人は笑みを浮かべて答えた、

「もちろん向かいますよ」

「そっちの方が面白そうだ」

そして三人は部屋を出て行った。

「では、私もこれで」

ドウガスも皇帝に挨拶をして外に出て行った。

「ふう・・・これで心配なのは、ナイアだけだな・・・しっかり

城で静かにしてくれていたらしいのだが……。」  
そしてゼルファアは大きく溜息をしてその部屋を出て行った。

ティアス、リーン、ヘル、ランスの四人はレーデン内の服屋にきていた。

ヘルの手には色々な服が持たれていて、リーンを見ては「こっちが良いかな……こっちも似合うなあ……」と声を漏らしていた。ティアスとランスはそこから早々に服屋から立ち去って外で待っていた。二人の服装は黒衣ではなくタキシードと呼ばれるようなピツシリした服だった。

「何でこんな動きにくい服を着なきゃならないんだよ……。」  
ティアスの愚痴にランスが苦笑いを浮かべていた。

「しかしこんな服を着る意味は分からないが服屋に来るのは当然だろ？」

「まあリーンの格好があれじゃな……。」

と言ってティアスはリーンの見つけた直後の服装を思い出した。重症で気が付かなかったがリーンの服装はボロボロで正常な状態のティアスでは話すことはおろか見る事だって恥ずかしくて出来ないほどだった。

まだ戦いのダメージが残っているティアスのタキシードの下は包帯でグルグル巻きだったりする。

そして待つこと数十分二人がやっと服屋から出てきた。

二人とも体のラインがハッキリと分かるような黒いドレスを着ていた。

「どうだい、綺麗になっただろ？」

と胸を張ってヘルが自慢をしリーンは恥ずかしいらしくヘルの背後に隠れた。

ティアスとランスは久しぶりにヘルに同感だと思った。

「ところで何でこんな服装にならないといけないんだ？」

ティアスの質問に「秘密」と口の前に一指し指を立てて答えた。さらに問いただそうと思ったティアスだがヘルがそのまま道なりに歩いていってしまいうがなくなっていく事にした。

そして着いたのはレーデンの城の城門だった、まったくヘルの意図が掴めないまま黙っているといきなりヘルが城門の兵士に話し掛けた。

「城に入りたいただけで入って良い？」

その質問に啞然としたティアス達と兵士だったが、その一瞬で怪しい者と兵士は判断したらしくヘルを捕まえようとした。

兵士も城門の守りを任されることもあり普通の兵士より多少強そうだったが、所詮は多少強い止まりだった。ヘルは繰り出される槍を滑らかな動きで避け兵士の懐に入り込むと兵士の額を人差し指で突つつきながら諭すように言った。

「中々良い動きだけど・・・私と踊るにはもうちょっと強くなることね」

そう言うってから兵士の足を払い転ばせた。

だが続々と騒ぎを聞きつけた兵士達が四人を囲んだ。

「これが作戦だったのか？」

ほぼ呆れながらティアスが聞くと

「おかしいわね・・・私の美貌が通じないなんて」

と本気で言っていたので三人は酷く止めなかったことを後悔した。

そしてランスが三人の前に出て地面に落ちていた持ちやすそうな木の枝を拾うと兵士達に向かって行った、前方に三人左右に一人ずつと兵士の位置を確認し軽く棒を振るうと五人の兵士が転んだ、兵士達は何が起きたのか分からず顔を見合わせ立ち上がるうとしたところでもたランスが棒を振るうするとまた兵士達が転ぶ、兵士達は気味悪がつて倒れたまま後ろに這って行った。

ティアスとヘルの目にはランスが相手の下の影を操って足を引っ掛けていたのが見えていたので声を殺して笑っていた。

不意にランスに向かつて短剣が投げられた、速度も狙いも今までの兵士とは全く違った的確なもので避けられないと判断したランスは足下の影を盾にして攻撃を防いだ。

「やるじゃん」

そう言つて白い毛皮を纏つた男が現れた。

「誰だ貴様……。」

睨みつけながらランスが問い掛けると男は笑みを浮かべながら答えた。

「レーデンの四大將軍が一人『白虎』のザツクルだ、しかし今の攻撃を防いだ術……見たことなかった技だが噂に聞く闇系統の魔法か？」

その言葉に少し驚いたランスだったが溜息をつきながら頷き肯定した。

「そうか……ということとは、明日この国を襲うための下見か？」

「何のことだか分からないな」

そう言つてランスはザツクルに向けて挑発的な笑みを浮かべる。

「そうか、しらを切るってんなら……その体に教えてもらうつもりかっ!!」

その瞬間ザツクルは両手にハグナクと呼ばれる刃物の爪をつける。

「貴様は強そうだから手加減は出来ないぞ」

ランスも影を数本の剣に変えた、剣の柄の部分には剣と影を結ぶように糸がついている。

「雷神よ、我が爪に……ってうわっ!!」

ザツクルは詠唱を途中で止めランスの作り出した剣を紙一重で避ける。

「え、詠唱無しかよ……これが闇系統の魔法か……。」

ティアスは心の中で「いやいやそいつだけだから」とツツコミを入れていた。

襲い掛かる多数の剣を避けたり、爪で弾いたりしながらザツクルは詠唱をする隙を伺っていた……だがランスには全く隙が見つから

なかった。

「上等じゃん・・・ならこれでどうだっ!!」

一気にザツクルの速度が剣が追いつけないほど上がり剣を無視しながらランスに迫っていった。そして残り数センチでザツクルの攻撃がランスあたるところでザツクルは嫌な予感がして絶好の攻撃のチャンス捨ててランスから離れる、そして刹那の隙も与えずランスの周りに影の剣の刀身が突き出た。

「よく避けたな」

素直にランスはザツクルを誉めたがザツクルは初めて負けるかもしれないと思った。しかし何かを戦闘中に考えてしまうことは格好の隙となってしまう。ザツクルの足に影が絡みつき足を拘束する。

「残念だったな・・・年の若さのせいってこともあるかもしれないが、もう少し先ほどのように集中しておけば捕まらなかったのにな」そして影で作った剣を一本取ってランスは勝負を決めようとした・・・だがランスの足は地面を踏み込むことなく穴に落ちる・・・ヘルの作った影の穴に、

「へ、ヘルっ!!今勝負中なんだが・・・。」

「勝負決まってるでしょ?それ以上の事をしたら弱いもの苛めだよ。」

ヘルの悪意無き言葉の一撃がザツクルの心に突き刺さる。

「弱いもの・・・苛め・・・。」

ザツクルは戦意を失い眩き始める。

「生殺しって酷いよな・・・。」

ティアスの口から同情の声があがるがヘルは全く気付かなかった、不意にリーンがランスに拘束を解くように命じザツクルに近づいていき、意気消沈しているザツクルに「気にしないでください」と言った。

その時リーンに向かって風弾が飛んできた、大気を圧縮した弾丸がリーンの直撃しようとした瞬間ティアスが庇うようにして身を盾に

した。そして風弾が炸裂しティアスとリーンが吹っ飛ぶ、直撃を食らわなかったリーンはすぐに起き上がったが、直撃を食らったティアスは直撃した部分と思われる背中側の服が破れ包帯が露になっていた。

そして風弾を放ったであろう男が悠然と歩いてくる、

「だらしないですねザツクル・・・同じ四大將軍として恥ずかしい」「ぐっ、うるせえ・・・大体なんでお前がここにいる？」

「何故って忘却の森に行くからに決まっているでしょう？」

そして二人の会話はここで終わった。

「あんた誰？てかティアスとリーンの二人に何してんの？」

怒りを堪えるようにヘルが聞くと男は名乗った。

「私は四大將軍のハザン、それでも『青龍』の二つ名を授かっています」

「そう・・・もういい死んで」

言い終えるとヘルは影の中に入って消える、そしてハザンの足下の影からヘルの手が出てくる手にはナイフが握られており、ハザンは足を浅く斬られる。

「小癪なっ！！」

ハザンが怒鳴ると何処からかヘルの声が聞こえてきた。

「小癪？馬鹿言わないでくれる？先に私の大切なものに手を出したのはあなたよ？大体無力な女の子を狙うなんて万死に値するわ」言葉が言い終わるとヘルが影から現れた。

「さあ、現れてあげたわ？でも私に貴方の攻撃が当たるかしら？」

ハザンは鼻で笑うと詠唱を始める

「我等を見守りし大いなる風よ、我が前に集い烈風となれっ！！」詠唱を終えると同時に周りの風が凶器となって襲い掛かった

「開け深淵の扉っ！！」

ヘルが唱えると黒い扉がヘルの前に現れる。凶器と化した烈風が目前に迫る中黒い扉は音をたてて開かれる、と同時に今まで荒れ狂っていたはずの風の存在が消える。

「さてと・・・この魔法結構魔力使うから・・・これで決めるわよ」  
そしてもう一つハザンの前に黒い扉が現れる、そして扉が開くと扉の中から勢い良く風が吹き荒れハザンを襲う。ハザンは何の抵抗も出来ず吹き飛ばされもみくちやになりながら地面に落ちる。

「自分の魔法にやられるなんて無様ね」

と言ってヘルは笑った。

「本気になるなんてお前らしくないな」

ランスの言葉に

「私がやらなかったら貴方がもつと酷い目にあわせてたでしょ？」  
とヘルが答える、ランスも凶星だったらしく頭を掻く。

「今日はティアスが怪我しちゃったし帰りましょう」

「そうだな」

そしてランスはティアスを担ぐと城門を後にした。

ザックルは四人が帰っていくのを見つめることしか出来なかった。

### 第十三幕

四大將軍であるザックル、ハザンの敗北はレーデンの兵士達の戦意を喪失させるには十分すぎた、異様な敵、全貌の見えない組織、圧倒的な力、恐怖の種は新たな恐怖を生み経った半日で兵士達の間には嫌な空気が蔓延していた。

ザックルは体には傷を負わなかったのでまだ良かったが問題はハザンの方だった、命に別状は無いものの決して動けるような体ではなかったためレーデンはハザンという、持ち駒を一つ失う事となった。そして森で陣を構えていたアルマにもその情報は伝えられた。

「馬鹿なっ！！」

怒号とともにテーブルに手を打ち付ける音がテントから漏れる、息の荒い若い男をアルマは黙って見据える。

「馬鹿など言っておらん・・・私は今回襲ってきた奴等が本当に敵だったのか分からないと言っただけだ」

「それがおかしい事だと言っているんですっ！！現にこちらには怪我人も出ているんですよっ！！」

若い男は幾分頭が冷えてきたのか声の大きさがだんだん絞られてくる。だがそれでもアルマに対して抗議の眼差しを止め様とはしない。

「ヘイルお前の言っていることがわからないと言っているわけじゃないぞ、ただもう少し情報を正確に掴み取れと言っているだけだ」

「話は・・・もう終わりですか・・・」

「いや、兵士達にすぐに闘える用意をしとくように言っておいてくれ・・・私の勘だと・・・敵がくるのは夜だ」

「分かりました・・・」

ヘイルと呼ばれた若い男は一礼してテントから出て行った、アルマ



はそれを見届けるとテントの脇に置いてある槍を手にとった。

「我が部隊は五百・・・敵はどの位だろうか・・・。」

そう呟くとアルマもテントから出て行った。

ナイアはシルフィとラウを連れて地下の収容施設に来ていた、目的はスレイスに会う為だ。

警備をしている兵士に一回一回丁寧に挨拶をしてナイアは進んでいった。

案内されたのは、白い大きな部屋だった。責任者のような兵士に待つように言われて待つこと数分、突然前方の扉が開き五人の兵士に連れられるようにしてスレイスが出てきた。

「しかし姫様は何故このようなところへ？」

と言う責任者のような兵士の質問に対して

「私用です」

と簡単に答えた。

「こんにちはナイア嬢、この私に面会とは物好きですね」

「物好きで結構ですよ・・・さて、本題に移ります。これから貴方をここから出します、約束でしたしね。しかしここを出るにあたって三つの制約がかせられうになりました。一つ目は、私の監視下に入ること、二つ目は、無断での魔法の使用を禁ずること、三つ目は、無断での戦闘行為を禁ずること・・・これらを守っていただけますか？」

「フッ・・・守らないと出られないのでしょうか？なら守りますよ」とスレイスは微笑を浮かべて答えた。

その後ナイア、シルフィ、ラウ、スレイス等四人は各種の手続きを分担して済まし城外へ出て行き街へ向かった。

街の中央にある宿屋の一室に青年が一人死んだように眠っていた、青年の周りには心配そうな顔を浮かべる者が三人いた。

「ティマス・・・目を覚まさないね」

ヘルがか細い声で言った、その言葉にランスとリーンが俯いた。

「私の・・・私のせいです・・・私が不用意に近づかなかつたら・・・」

「姫様のせいじゃないぜ・・・ティマスだつてすぐに目を覚ますさ」  
そして部屋に沈黙が訪れる、誰一人として喋らない空間がこのまま続くかに思えたときだった。

「うう・・・ん？ありゃ？何で宿で寝てるんだ？」

その言葉にリーンは顔を輝かせる、そしてヘルとランスが安堵の表情を浮かべる。

「ティマスっ！！良かった・・・本当に良かった、死んじゃうかと思つたよ・・・」

リーンが嬉しさのあまり抱きついてきたので、ティマスは固まる・・・そして身体中の血液が顔に集まったのではないかというくらい顔を赤く染めた。

「リ、リーン・・・ち、近いぞ」

全ての力を振り絞つて言つた言葉にリーンは冷静さを取り戻し改めて自分の行動を考えてみる・・・身体は密着し顔はかなり近く相手の息が届く・・・今度は逆にリーンが顔を真っ赤にし後ろに飛び退いた。その光景を「微笑ましいねえ・・・」とヘルとランスが笑つていた。

その後リーンがご飯を買つてくると言つて、護衛にランスが着いていった。ヘルと二人つきりになると突然ヘルがティマスの包帯を変え始めた。

「ティマス・・・姫様を思うのはいいいけど痛いときは痛いって言わないと・・・」

そして包帯の背中の部分にはかなりの量の血が滲み出していた。

「何時から気付いた？」

「あのねえ・・・姫様に抱きつかれた時に脂汗を垂らしてたら誰だ  
ってわかるでしょ」

そう言いながらヘルはティアスの包帯を替え終える。

「今回の戦い、言いたいことはたくさんあるけど・・・その傷なん  
だから無理だけは、しちや駄目だよ」

「分かってる・・・だけど、リーンに危険が及んだ時は・・・。」  
その時ティアスの目に何かが宿ったのをヘルは見逃さなかった。

「大丈夫・・・そうになったら私・・・優しさを捨てるから」

と言葉の裏に大きな悪意を隠してヘルが答えた。

そして扉が開く音がした。

「美味しそうなものがいっぱいあったよっ!!」

とリーンが嬉しそうに語った、見ていたティアスとヘルの顔も自然  
に緩んだ。

遅れてランスがやって来た時には、夕食が始まっていた。

そして食べ終わった四人はさっきまでとはうって変わって真剣な顔  
つきになる。

「組織の行動パターンから敵が現れるのは零時だと思う」

ヘルの言葉に三人は頷いた。

「零時まで後三分・・・一体何が起きるんだろうな」

ランスが生睡を飲み込みながら問うが答えは誰からも帰ってこない。  
「では行きましょう」

リーンの言葉に三人は頷き、四人は宿屋を後にした。

そして零時・・・轟音がこの地域を包み込んだ。

## 第十四幕

今日と明日の狭間の時間零時、突然轟音が鳴り響きレーデン国内の兵士達の身体が自然と固くなる・・・。

そして、轟音の発生位置に程近い忘却の森に拠点を構えるアルマは隊列を崩さぬようにしつつ回りを警戒し轟音のした方向へ向かった。轟音はまだ続いている、そしてアルマは前方の木々が次々と地面に飲み込まれていっていることに気が付いた。それからの判断は早かった、すぐさま兵士達に後退するように命じ自身も急いで後退をはじめた。背後から轟音が近づいてくる、それに伴いアルマの軍勢の足も自然と速くなる。

そして気が付くとアルマの軍勢は忘却の森の外へと出ていた。そこで轟音が止む、アルマは振り返り忘却の森の方向を見るとそこには、木々が一本残らず消えていた、そして次の瞬間地面から何から出てくるのが見える・・・出てきたのはなんと腐乱したモンスターや人間のゾンビだった。

そのゾンビの集団は、圧倒的に多かった。ざっと見たところ五千はゆうに超える敵の数・・・そしてアルマの軍勢は怒号とともに突撃していった。

個々の実力はこちらが上回っていた、兵士達は鼻につく異臭を物ともせずゾンビ達を駆逐していった。

アルマは最前線で戦い炎を纏わせた槍でゾンビ達を灰にしていた。そしてアルマは敵の集団に槍を投げ込む、投げた槍は進路上の敵を貫きながら進んでいく。

「爆ぜろっ！！」

アルマの声に反応するように槍は爆発を起こす、爆発は半径三十メートルにも及び小さなクレーターを作った。

爆発を見た兵士達は歓喜し、士気が上がっていった。

その爆発はナイア達にも見えていた。

「ほお……流石は火の神具『炎槍ロドアド』ですね。いやはや火の系統の魔法使いとして憧れの一品ですね。」

スレイスが嬉しそうに言う

「炎槍ロドアドってなんだ？」

ラウの問いに三人は驚いたように顔を見せる。

「ラ、ラウ……貴方学校の授業を聞いた無かったの？」

呆れたように言うシルフィの質問にラウが迷いなく頷いたので深く溜息をついた。

「あのねえ……炎槍ロドアドって言うのはスレイスが言った様に火の神具なの、神具には他にも四つの物があつて、水の神具『水槍ミラード』雷の神具『雷斧バルディ』地の神具『地鎚グラーダ』風の神具『風剣フアンズ』って物があつてロドアドと同じ力位を持っているの、そもそも神具っていうのはそれ自体に絶大な力を秘めた武器のことを指していて……つまり物凄い武器なの」

喋りつかれたのかシルフィは最後分かり易くまとめた。

「そうなのか……でも待つてくれ……それじゃあ光と闇の神具は無いのか？」

「理論的にはあるわね……でもそんなもの誰も見たことないわ。殆どの人たちは、見たことないもの……いわゆる未知の物を存在しない物として見てしまつてわけ、闇系統の魔法をこの目で見る前の私たちがその存在すら信じてなかったようにね」

その言葉に三人は思わず頷いた。

「さてと……質問は……もう無いわね？じゃあ行きましょうナイア様」

ナイアは頷いて歩いていく……向かった先は爆発の起きた忘却の森の方向だった。

「うわぁ・・・嫌な空気」

そう呟いたのはヘルだった。

「そうだな」

とティアスが頷く、四人はレーデンから少し離れた場所に立っていた。前方三キロ程の所には粉塵が上がっており戦闘が続いているのが見て取れた。

「早く行きましょう・・・兵士さん達を助けないと」

リーンの言葉に進みだそうとした時だった、背後から結構な速さで近づいてくる気配を感じ三人はリーンを囲むようにして立つ、気配は四つだった。

段々と姿が見えてくるにつれてティアスとヘルの表情が変わってくる。ティアスは驚いた顔で呆然としヘルは笑いを堪えた様子だった。二人の様子にリーンとランスは首を傾げるばかりだった。向こうもようやくこちらの様子に気付き驚いた顔をする。そして相手の女が驚愕の声を出す。

「ル、ルーク！？あんたなんでこんなところにいるの！？」

一行はナイア、シルフィ、ラウ、スレイスだった。

「ルークって誰？」

リーンの言葉にティアスは

「さあな・・・人違いじゃないのか？」

と答えた。

一方シルフィはティアスの言葉に怒ったようで、ティアスに近づいていった。

「人違い？そんなわけないでしょ！！」

そう言いながらシルフィは殴りかかる、そんな行動に出たシルフィにナイアとラウは驚いた。

少し前までいつもの様に殴っていたコースと角度、あたると思ったシルフィの思惑は脆く崩れた。

ティアスは、シルフィの攻撃を半歩下がるだけで交わし軽く足を払って転ばせる、シルフィは豪快に転び背中から落ちる。

「いきなり殴りかかってくるなんて・・・一体どういうつもりだ？」  
ティアスはそう言いながら転んで仰向けになったシルフィを睨みつける。

シルフィは言い返そうとするが転んだ衝撃で正しく呼吸が行えず、声は咳き込むだけとなった。

「ティアス・・・女性にそれはやりすぎです」

リーンが少し怒ったように言ったので、ティアスは黙って三人のもとに戻っていった。

「ルークっ！！お前っ！！」

次に殴りかかろうとしたラウを自身の影が縛り付ける。

「事情はよく分からないんだけどよ・・・こいつはルークじゃなくてティアスだ。それに仲間なんでね、喧嘩するんなら相手になるぜ」  
ランスがそう言うとなラウを縛っていた影の締め付けが一層強くなる。  
「ランスもやめて下さい」

リーンの言葉にランスは大人しく従いラウを拘束する影を解いた。  
ラウは、片膝をついて呼吸を整える。

「ティアスとランスがすみません」

リーンがナイア達四人に謝るとナイアは気付く、

「もしかして・・・貴女リーンさん？」

ナイアの言葉に驚いた顔を見せるリーンだったがつかりと頷いて答えた。

「やっぱりそうでしたか・・・確かにあの絵の面影は残っていますね。」

「・・・ところでティアスと知り合いのようですか？」  
絵という言葉が気になったがそれよりも気になっていたことを聞いた。

「そうですね・・・ちょっとした知り合いですね。」  
とナイアは微笑を混ぜて答えた。

「ナイア・・・何故炎帝がそこにいる？」

そこで初めてティアスが自分から喋る

「スレイスは私たちの仲間になりました。」

その言葉に驚いたティアスだったが「そうか」と小さく呟き静かに歩いていった。

「ティアス先に行つては・・・すみません失礼します。」

そう言つてリーンはティアスの後について行つた。

「色々と悪かつたな」

「また運命の導きがあつたが時会いましようね」

そう言い残してランスとヘルも後を追つていった。

「いやはや・・・まさか魔王の仲間がある二人だったとは・・・。」  
驚いたようにスレイスは言つた。

「知っているの？」

ナイアの問いに「ええ」と頷いてスレイスは語りだした。

「『魔女』のヘル、『武装王』のランス、どちらも『神』の部類に入る魔法使いですよ。」

「『神』の部類？」

「簡単に説明しますとね・・・私たちの組織は五つの部類に力を分けているんですよ、一番下の部類を『地』、次に弱い部類を『人』、次を『王』、次を『天』、そして一番強い部類を『神』とね。私の部類は『天』で、焰は『王』でした・・・単純に計算するとあなた方の部類は『人』ですね。アルマさんも『天』でしょうね」

その説明を聞いた三人はいかに自分達が弱い存在なのかを唇をかみ締めながら知つた。

「しかし驚きましたよ・・・まさか三人の『神』の部類の人たちがたつた一人の少女を守っているんですから」

「えっ！？ルークも『神』の部類なの？」

「ナイアさん何言ってるんですか？私をやすやすと倒した魔王が『神』じゃ無ければ何なんですか？」

「それもそうね・・・でも待つて・・・じゃあ『神』の部類が三人



もいるんだったら簡単に貴方のいた組織が潰されちゃうんじゃないの？」

「それは無いですね、私のいた組織の創設メンバーであり組織の名前ともなった『人魔六神<sup>じんまろくしん</sup>』がいますからね」

「その人魔六神って？」

「コードネーム、一之神、二之神、三之神、四之神、五之神、六之神と呼ばれる最強の猛者達です。詳しい事は『天』の部類である私には教えられませんが、どうやら名前のどつり人と魔物で構成されていてその実力は圧倒的だとか……。」

「要するに……化け物集団って事ね」

シルフィが起き上がりながら言う。

「そうですね……ああでも組織の名前とこの事はあまり喋らないでくださいね。」

とスレイスも言う

「それよりも早く行かないと……戦闘が始まってからもう結構経ってる。」

ラウの言葉に促されるように、ナイアとシルフィは頷きスレイスは頭を掻いて少し笑いながら駆けて行った。

そしてラウも走っていった。

## 第十五幕

戦闘から二十分後、まだ両者の戦力は拮抗していた。

何人かの兵士はゾンビに囲まれ苦戦を強いられているようだがアルマの鬼神の如き戦いぶりがそれを補っていた。

そしてアルマは現在七体のドラゴンゾンビと戦闘を行っていた。

ドラゴンゾンビはプレスなどの特殊な攻撃こそ出来ないものの巨大な身体を生かした突進などにより少々厄介な相手となっている。

アルマは七体のドラゴンゾンビを見据え額の汗を拭っていた。

「やはり・・・敵の数が多すぎるな・・・。」

そう言つて炎槍を力強く握り締めると炎槍は呼応するかのようになその身に業火を宿した。

そしてアルマ自らにも炎を纏い上空へ飛んで行った。

アルマの身体は金色の炎により鳥の様な姿になりながら上空へ舞い上がっていく。

その金色の炎の鳥を見た兵士達は皆一斉に歓喜の声を上げ士気が上がっていく。

「オオオオオオ！！すざくえんしやうせん朱雀炎翔閃！！」

雲に届くかと言ったところで金色の炎の鳥旋回し地面へ向けて加速していった、そして怒号とともにドラゴンゾンビのいるところに突っ込んでいった。

一瞬の閃光の後に大気が焼かれ大地が焦土と化した、もちろんその一帯にいた数百のドラゴンゾンビを含めたゾンビは何が起こったのかも分からないまま灰塵と化した。

その場に残ったのは赤く焼かれた大地と熱い空気と小さなクレーターの中心にいるアルマだけだった。

「先ほどの技があゝアルマという男の二つ名の由来にもなった、神し技んぎ朱雀炎翔閃か……。あれは俺の無限武装むげんぶそうでも防げそうに無いな」  
遠くから先ほどの光景を見ていたランスが唸るように言った。

ヘルも「そうだね」と頷いていた。

この二人は一応加勢に来たのだがティアスが傷を負った恨みとアルマの戦いを見ていたと言う気持ちからずっと眺めていた。

ティアスは傷が響いたらしく近くで横になっていた、そしてその隣には必死にティアスを看病するリーンの姿があった。

仲間と主以外を攻撃目標とするゾンビはもちろん少し離れたところにいた四人の下にも来たのだが全てランスの作り出した影の戦士達によって倒されていた。

不意に戦場の兵士達がいらない場所から鎌風が巻き起こり砂煙をたてながら数体のゾンビ達を切り裂いた。そして続くように水と氷の奔流がゾンビ達を押しつけ、そこから四人の人影が現れた。

「おっ！？ティアスの知り合いは魔法使いだったのかヘル？」

「あれ言ってなかったけ？ティアスってば、あの風と氷の魔法を使つた子と同じ魔法学校に通つてたのよ」

「ほお……。最近の魔法学校つてのはレベルが高いんだな」

ランスの感心したような口ぶりに「あの子達は特別なのよ」とヘルが言葉を付け足した。

「特別かぁ……。確かに頑張れば俺たちとはいかないまでもアルマの神具無し状態と互角になれそうだな」

どうやらランスは二人のことが気に入ったらしくずっと目で追っていた。その様子にハアとヘルは深く溜息をついた。

「んで……。これからどうする？ずっと此処にいるっていうのも駄目だろ？」

「そうね、とりあえずティアスがちょっと回復したら姫様の護衛を任せて加勢に行きましょう」

そしてランスとヘルの二人はティアスとリーンを優しく見てお互い軽く頷いた。

「皆さん、そんな様子じゃ加勢に行く前に死んでしまいますよ？」  
軽い口調でスレイスがシルフィ、ラウ、ナイアに問い掛ける。シルフィとラウはスレイスを睨むことで答え、ナイアは苦笑いでゾンビを迎撃していった。

「あのよ・・・こいつ等いったいどの位いるんだ？」

ラウがゾンビを小さな氷のドームに閉じ込め凍りづけにしながら問い掛ける。

「ゾンビの事ですか？あはは、こいつ等は作り出している奴を倒さない限り永遠に出てきますよ」

その答えに三人は攻撃の手をいったん中断し驚きながらスレイスを見た。

「それって、倒しても意味がないってわけ？」

「意味がないわけではないですよ？ゾンビを作り出すのにだって多少魔力を使いますし、ですがそこまで使うわけじゃないですからほぼ永遠に出てきますよ。それが彼が『死霊使い（ネクロマンサー）』と呼ばれている由縁ですから」

スレイスは彼がの部分を親しみを込めて言ったのをナイアは聞き逃さなかった。

「スレイスさん、貴方もしかしてその方と知り合いなんですか？」

「知り合いも何も彼とは何度も一緒に戦ったし、それに数少ない私と戦って生き残った相手でしたからね、友と呼んでもいいくらいですよ」

何の悪びれも無くスレイスは愉快そうに答える。

「炎よ、敵をなぎ払え」

続けて詠唱をすると炎が現れゾンビを一気に駆逐する。

「さてと・・・厄介なのは死霊使いではなくその上司なんですよ、多分今回の作戦の指揮はあの方が出していると思います。」

「あの方って？」

「普段は気が抜けているので作戦の現場には必ず遅れて来るのですが、作戦現場に到着したら最後こちらが皆殺しになってしまう様な方です。」

恐ろしいことを淡々と言うスレイスに呆然としつつ事態の危険性に気付いた三人はスレイスの炎が残っているうちに進んでいった。

一方敵側の本陣では死霊使いであるドニオンが上司の到着が遅いことに困っていた。

「はぁ・・・ゲイドさん遅いよ、このままじゃ僕のゾンビ達がどんどんやられてここまで敵が来ちゃうよ」

そしてドニオンは詠唱を始める。

「悩める魂たちよ、我が声を聞き入れ死を恐れぬ兵士となれ」  
すると地面からゾンビが数十体出現した。

「行けゾンビ達、一人でも多くの人間を道連れにするのだ！！」

そしてゾンビ達は兵士達の下へ向かって行った。

そこに影で何かが移動をしてきた、警戒をして剣を構えたドニオンだったが現れた人物の顔を確認し安堵した。

「遅いですよゲイドさん、さて一気に巻き返しましょうか」

そして戦場は激化する

## 第十六幕

「うう・・・リーン？」

横たわっていたティアスが始めてみた光景はリーンの横顔だった、必死にこちらに呼びかけている顔がいとおしくて愛らしくてずっとこのままでいたいと思った。だが戦場はそんな時間さえも許さずその爆音にてティアスを我に帰らせる。

ゆつくりと起き上がるティアスに気付いたのかヘルとランスも近づいてくる。

「おいおいティアス大丈夫か？」

ティアスは額に汗を浮かべ無理矢理笑顔を作って答える。

「ちゃんと魔法は使えるの？」

ヘルの言葉にティアスは魔法を唱える、すると影は実体化しティアスの指先に導かれるように動いた。

「とりあえず使えるみたいね・・・ティアス、貴方はここでお姫様を護っていて、私とランスはレーデンの援護に向かうから」

ティアスは「俺も行く」と目で訴えたがヘルは首を振って横目でリーンをチラリと見ると

「貴方の大切なものは何？」

その言葉にティアスは口を結んで小さく「わかった」と言った。

「じゃあ私たちは行くからね、しっかりお姫様を護るのよ」

「やばくなったら俺等をすぐに呼べよ、何処からでも駆けつけてやるから」

そう言うヘルは影の中に入って消え、ランスはゾンビの大群に囲まれているナイア達四人の下に向かって行った。

「リーン、離れないでくれよ」

そしてティアスは唱える。

「影よ舞え」と・・・。

スレイスはゾンビを倒しながら考え事をしていた。敵の数とこちらの戦力どう頑張ってもアルマのいるところまで行くにはかなりの時間が掛かる、そうしている間に奴が来てしまったらどう足掻いても勝てる見込みは無かった。

「状況は極めて悪いですね」

その時左側のゾンビが吹き飛んだ、スレイスを含めた四人は啞然としてその方向を見ていると足音が一つ聞こえてきた。

「やあやあ元気かい？」

気の抜けるような言葉を発しながら現れた人影に四人は驚きを隠せなかった。

「あ、貴方は・・・武装王ランス!？」

ランスはスレイスを一瞥するとシルフィとラウを見てニヤリと笑う。

「な、何なんですか？て、敵ですか？」

シルフィの言葉に四人は息を飲み込み身構える。

「おいおいせっかく加勢に来てやったっていうのに酷い扱いだなあ」その言葉に目を丸くする四人だったが意味を理解したスレイスは声を殺して笑った。

「それは心強いですね、では武装王周りにいる敵を倒していただけますか？」

ランスは「武装王じゃなくてランスって呼んでくれ」と小さく言う」と親指で首を掻き切る真似をしてゾンビに「消えろ」と言う。

するとランスの影から巨大な斧を持った腕かいなが現れ斧でゾンビ達を一閃する。

振り終えた腕は幻のように消えそれと同時にゾンビ達の身体がバラバラに吹き飛ぶ

「こんなもんでいいか？」

軽く言うランスに改めて四人は畏怖を込めて視線を送る。そんな視線に気付かないランスはケラケラと笑ってゾンビ達の死体を踏みつ

けて歩いていった。

その頃ヘルはある男と向かい合っていた。

「ふっふっふ、魔女よ我に勝てると思っているのか」

男はヘルに向けて槍を取り出す、ヘルは不敵な笑みを浮かべて男に影で作った短剣を向けてこう言い放った。

「あらあら、流石は『雷神』の二つ名を持つゲイドね。でも倒せなくてもランスがここに来るまでの時間稼ぎなら出来ると思うわよ？」そしてヘルは影の短剣をゲイドに向け放った、一本だった短剣が次々と分裂し十六本となりゲイドを襲った。だが槍を軽く振り回し短剣全てを消し飛ばした。

しかしその行動を予測していたヘルは短剣を両手に持つてに懷に潜り込もうと踏み込もうとする、ところが踏み込もうとした足場に一筋の雷撃が放たれる、がヘルは避けようとするどころか更に速さを上げて踏み込み雷撃の速さを超え見事避けた。感心したように口元を吊り上げたゲイドだったが慌てた様子も無く詠唱を始める。

「集まり、纏われ、雷光よ」

すると持っていた槍が青白く光だす、その時にはヘルの刃がゲイドの眼前にまで迫っていた。ゲイドはいまだ慌てた様子も無く地面に槍を突き刺す。するとヘルは足に違和感を感じる。

「なっ！動けない・・・。」

ヘルの足はまるで地面に縫い付けられたように動かなくなった。攻守は逆となりゲイドは槍を突き出す。ヘルは地面に手を当てると滑り込むように影の中に隠れた。

「隠れても無駄だ、我が雷震らいしんを受けたその足には蜘蛛の糸のような電撃が纏わり付いているのだからな」

そして雷撃が地面に向けて放たれる、だがその先には地面は無く雷撃は飲み込まれる。と同時に辺りを眩い閃光が包み込むのと同時に



影からボロボロになったヘルが現れる。

「ぐう……。やってくれるじゃない……。もういいぶち殺すつ  
！！」

そしてヘルは小さく呟く

「ごめんね、ティアス、ランス、封じたはずのこの力を使って……。そしてお姫様、今からの私の姿を見ないでください……。」  
そしてヘルは声高々に詠唱する。

「闇の淵に封印せし魔女の力の解放を私は願う……。来なさい、三年の時を経て忌まわしき魔女の力よ」

言い終えたヘルの目には涙が宿っていた、そして一瞬の沈黙の後何かに耐えかねたように首につけていた逆十字のネックレスの中央についていた黒い結晶が碎け散った。

## 第十七幕

黒い雲が戦場の上空に渦巻き始める、その様子はまるでこれから起こる災厄を予兆しているようだった。そしてその雲を見上げたランスが小さく呟く。

「ヘル馬鹿野郎……。」

そして四人を護衛するランスの攻撃が一段と荒々しくなった。

「あの大战を治めた『崩壊の一週間』を作り上げたという三人の一人の魔女、少々弱すぎてがっかりしていたのだがやはり力を隠していたか、これなら楽しめそうだな」

ゲイドは口元を歪めながら黒い瘴気に覆われているヘルの方向を眺めながら呟いた。次第に瘴気は消え失せ一人の女性が立っているのが見え始めた。が、ゲイドは現れた女性、ヘルを見て驚きと苦笑を織り交ぜた顔でヘルの肩に目をやった。肩には引き締まった身体をした黒猫が一匹座っていた。

「ね、猫如きにあの大層なセリフを……長つたらしい謝罪を呟いていたのか、ア、アハハハハっ!!」

堪えきれないと言った様子でゲイドは爆笑し始める。

「我を猫と愚弄するのか？人間風情が、少し恵まれた性能があるだけでつけあがりおって……」

少しトーンの低い声が辺りの空気を震わせて響く、その声はゲイドのものでもヘルのものでもなかった。

「誰だ？」

ギロリと周りに睨みを聞かせるゲイドだったが周りには二人以外誰もいない。周りを見ているうちに不意にヘルの肩にいた黒猫と目が合い、黒猫がニヤリと口元を吊り上げる。

「何が人間風情だ、下等な猫がつ!!」

叫ぶと同時にゲイドが駆け出そうとするのをヘルが影の短剣を足元に放って牽制する。と同時に言葉をつむぎ出す

「私の召喚に応じていただきありがとうございました。」

その言葉は二つの意味を持っていた、一つは黒猫に対する敬意、もう一つはゲイドの無視及びもはや眼中にないという無言の圧力

「形式的な言葉はよい、して今回が二度目の召喚となるが、お前の決心がついたと考えていいのかな？」

しつかりと頷くヘル、この光景を黙って見ていたゲイドは二人のやり取りに何故か悪寒が走った。

フ、フハハ・・・震えが止まらぬわ、待っていた、待っていたぞこの感覚、人魔六神の一之神にやられた肩の傷が疼くぞ・・・。

「では、確認するぞ。我との契約前回の時はお前の器としての力を見ると言うことで一週間の間のみしか我が力の全てを宿らせることは出来なかった。だが今回は完璧にその身体に我が力が宿ることとなるう、それは前回とは違い一生の間力を宿らせることとなるう。

だがそれにもない前回一週間の間だけだった破壊衝動、殺人衝動そして精神汚染が一生お前について回る事となる。それを理解したうえで力を求めるならば、契約の言葉を言うがよい」

すると一呼吸置いてヘルは言葉を紡ぐ

「この世の狭間より来たりし奈落の化身よ、その貪欲なる意思と力を我に与えたまえ。」

そしてヘルを中心とした半径五百メートルの世界が、空間が暗転した。

影を操りながらティアスは自分の首に付けてある逆十字のネックレスが怪しく光っているのに気付いた、思い当たることはたった一つ

だけ、ヘルカランスかその両方が召喚を行ったという事だ。幸い背に隠れているリーンにはネックレスが見えていないらしく気付いていない。

「だけど・・・召喚をするってことは、かなりやばい状況に陥っているってことか・・・」

そして頭の中にひとつの単語が浮かび上がる

『崩壊の一週間』

これは三人の罪、自分の使っている力を制御し切れなかった過去の自分の象徴、そして消えることのない傷跡

そこまで考えてティアスはギュツと歯を食いしばる。

「三年前には扱えなかった力、二度と使わないと決めた力、もしそれが開放されるんだとしたら俺は・・・ヘル、ランス、あんた達をリーンの敵と見なして殺さないといけないよ」

その声はいつものような覇気がなく、歳相応ともいえない幼い言葉で、とてもとても弱いか細い声だった。

ふと背後でリーンの温もりを感じる、それが満身創痍のティアスのエネルギー源であり唯一無二の心の拠り所だった。そして少し気が飛びすぎて影が思ったとおりに動いていなかったのか数体のゾンビがすぐ近くにまで迫ってきた、それを足元から出た影の針が刺すのではなく難いで弾き飛ばす。

「やっぱりさどんなものを捨てても一番だけは護りたいんだ、大切なものはそれこそ星の数ほどあるし誰も本当は殺したくない、昔の俺はこんなことなんて考えもしなかったのにな。」

その言葉は周りにいるリーンやゾンビに当てられたものではなかった。

「ああ、確かに昔の俺は本当に弱かったさ、それこそ一般人と変わらないほどにね。なあゲオルド、俺は君と言う力を手に入れたからこそこんな事を考えるようになったし、少し前までは君の身体を剣という形にして使っていたから君を身近に感じていたんだと思う。それでも君は一番じゃなかった、だって一番は彼女って決まってい

たからね、だから俺は一度君を捨てて彼女の為に頑張ったんだ。確かに君という最大戦力を失ったのは俺にとっても苦しくて悲しくてとても辛かった、でもそれ以上に彼女との約束を護ることの方が俺には意味があるように考えられた・・・でも、いつからだろうな自分の力不足に嘆き始めたのは、魔眼と称されるこの闇の瞳に更なる力を求め始めたのは、ホントにきっかけは偶然だったね。勝てるはずのない戦い、倒れていく仲間だった人達、こんな極限の状況下だったからこそ全てを犠牲にしても生きたいって思ったんだと思うね。だってそうじゃなかったら本当の君を姿を見ようと考えることはなかったと思うからね。で、あの時から俺には罪を背負う為の二つ名が付いたんだと思う『魔王』っていう二つ名がね。なあゲオルド・・・君はどう思う？剣であり固有の個体である君が返答してくれるなんて思うほど流石の俺も狂っちゃいない、だけでもし今の俺の考えを聞いて答えてくれるとしたら君は何て答えるかな？この『全てが欲しい、そのために力を使いたいけど一番がそれを嫌っている』なんて他愛ない質問をさ・・・。」

一人で話し続けるティアスに不安を感じたリーンはティアスを振り向かせようと肩に手をかけた、ところがティアスはいきなり不気味に笑い始めた。

「クッククク・・・そうだよな。剣には意思がない、だがそれを振るう者そのものの意思こそが剣の意思、単純なことだけどすぐ忘れる。なら俺はもう迷わないよ。善も悪も関係ない俺の前、俺の前に立っている全てのモノが俺の破壊対象なんだよね」

そこまで呟き終わるとティアスは振り返りリーンの額に指をつける。

「リーン・・・少しの間だけ目を瞑っていてくれ」

そしてリーンの反論を聞かないうちに指先は淡く光りリーンは眠った。

「さてと、答えはもう出た。俺は君と同じで強欲で掴みきれないって分かっているでも掴んでしまうからね、じゃあ来てくれ魔剣『ゲオルド』」

するとトプンと水に何かが落ちるような音とともに影から一本の漆黒の両手剣が現れた。

俺の予想ならランスは召喚なんて馬鹿な事はしない、ランスもきつと気付いてるその時にあっちにいる奴らにリーンを任せて、二人でヘルを止めに行くっ！！

そこまで考え両手用の剣である魔剣を片手で振り上げる、その動作の途中に物凄い量の魔力が刀身の玉の一つに注がれた、そして刀身についている小さな玉の一つが紫に淡く光る。と同時に振り上げた魔剣を強引に地面に振り下ろす、その瞬間魔剣の先端から黒い三日月型の衝撃波がゾンビ達を蹂躪する。一瞬の沈黙の後その場には荒々しく地面が抉れた後しか残っていなかった。

「魔<sup>まげき</sup>撃二式……。」

小さく呟くと傍らに眠らせたリーンをまるで割れ物を扱うように優しく抱きこみランスのいるであろう場所に走っていった。

「じよ、冗談じゃない……情報じゃ魔王は傷だらけって聞いていた。それなのにたった一振りで僕のゾンビ達を駆逐してしまうなんて……。」

遠くの方でゾンビの視界を通してティアスを見ていたドニオンは唸るように言った。

「しかし何なんだあの剣？あんなの魔王のデータには載っていないかった……！？もしかしてあれが『崩壊の一週間』を作り出した……。たった五十人の魔法使い達が組織に敵対する国の二万の軍勢との交戦で戦力差を一気にひっくり返したと言われる三人の中で最強称される魔王の秘密なのか！？」

そこまで考えてドニオンは思考を中断させる。

「人魔六神に応援を求めなければ……こちらが負けてしまつかもしれない……。」

そこまで考えドニオンは一体のゾンビに走り書きした手紙を渡し影で組織に送った。

「しかしこれで分かるかもしれないな・・・何故あの三人が闇系統の魔法使いの中で群を抜いているのか、これが分かれば僕の実力も神に近づけるかもしれない・・・。」

そしてドニオンは醜惡な笑みを浮かべた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8468c/>

---

『エデン』～三つの瞳～

2010年10月11日21時17分発行